

経済と経営 32-2 (2001.9)

〈研究ノート〉

ネパリ・ダイバーシティ

進 藤 賢 一

1. はじめに

巨大国、インドそして中国に挟まるように小国ネパールがある。この国を統治していたシャハ王は「巨石に挟まるヤムイモ」と国の位置及び領域を表現をした。ネパール人のことを現地ではネパリと呼ぶ。

この国はいろんな顔をもつ。国は狭小でありながらいつも様々な視野で世界の注目を集めている。

小国であるにも拘わらず気候は熱帯から寒帯までの変化に富み、地形は世界最高峰の8,000 m級の高山から標高200 mの平地までの落差に富む。民族、言語、宗教の文化的要素の交わりが複雑多岐にわたっているながら諸民族の間に紛争や騒動があまり起こらない。妙に統一がとれているように映ずる。インド人が北上してネパールに住み込み、あるいは通り越して中国方面に、中国人とくにチベット人が南下してネパールに定住し、あるいはインドに向かう。ヒンドゥー教徒が南から、ラマ教徒が北から、イスラーム教徒が西から入り込みネパールに根付く。こんな文化的混淆地帯・カオスの世界が他にあるであろうかと思われるほどである。

植民地化を嫌って長い鎖国経済を保持したため開国してみれば世界の最貧国、王族がときには圧政、ときには民主化とめまぐるしく変わる政策を展開

する。そして 21 世紀初頭 (2001 年 6 月 1 日) には皇太子の仕業で国王夫妻以下 9 名の王族が射殺される事件が発生したことは目に新しい。

国民所得の低さと就業機会の乏しさから、国外への出稼者が多いのもネパールの特徴だ。外人部隊 (これは香港, シンガポール, インドのイギリス軍などの傭兵) として働くゴルカ族は世界最強の兵士ともいわれ, 他方, ヒマラヤ登山が活発化すると山岳サポート隊としてシェルパ族が大量に登場し, 輝ける世界最高峰群登山史に名を刻む。

途上国につきものの腐敗と汚職は外国の開発援助や国連の経済援助を水が砂漠に消えるように有効に働かせない。インフラの整備は遅れ, 主要産業である農業の近代化は進まない。失業者は就業人口の 15% とも 20% ともいわれるがきちんとした統計にお目にかかれない。

それでも人口は急増し, 人口爆発の様相を呈している。貧しさからの脱却は, 子供は働き手として家庭経済を支えるものだという思想に支えられているからだ。

識字率は 41.4% (男子 59.1%, 女子 23.8%) <世界各国要覧 2001・二宮書店> で男女の教育各差も極端だ。

有名なチベット学者であり, ネパールの文化に関する権威といわれるトウッチィ教授は「多くの研究者が調査に携わっているにもかかわらず, ネパール民族誌研究は最も複雑なものの 1 つである」^(註1) といい, この国の文化事情の解明しにくさを物語っているかもしれない。

ネパールを地図上で検索するとちっぽけな内陸国のイメージだ。三方をインドに, 北辺を中国に囲まれ, パキスタンやブータンに繋がっていない。国土は北海道の 2 倍に満たない 14 万平方キロメートル, 東西は 1600 キロメートルあるが南北はわずかに 200 キロメートルほどしかない。南アジアに属する亜熱帯地域であるこの国は, 北のヒマラヤを含む高山地帯 (4,000~5,000 m 以上), 南はインドのヒンドンスタン平原に続くタライ平原 (標高 600 m 以下), その中間地帯は一般に丘陵部と呼ばれる波状台地で様々な河川が深くま

た広い谷を形成している。南北でいえば北は屋久島、南は沖縄本島南端の範囲におさまる位置にあるが気候では台湾からサハリン（部分的には北極圏）に及ぶ範囲を凝縮した内容になっている。世界の屋根ヒマラヤから南に向けて斜面が展開し、ヒマラヤ高山域からガンジス川流域のタライ平野までは僅かに札幌～函館の距離だ。高山域は万年雪に覆われる酷寒な地、タライはサラソウジュ（ショレア・ロブスタ）の育つ亜熱帯森林でわずか1世紀前までは猛獣と悪疫のはびこるジャングルだったのである。河川は北から南に流れる無数の縦谷と、それを繋ぐ横谷があり流域の水はガンジス川に注ぐ。

こうした地形的、気候的制約があつてか、ネパールには多くの民族、言語、宗教が存在し、それらが互いに共存し合っている。自然の障壁が交通輸送の阻害要件となり、広範囲での文化交流が難しかったともいえる。はじめから別々の民族として発生したのではなく周辺地域から流入、移住した歴史があり、かれらは自然の障壁に囲まれて文化相違いの融解ができなかった側面もあろう。ここでは文化衝突にともなう紛争、部族闘争、戦役がほとんど見られない。ネパールの丘陵地帯やタライの平野は一見、豊穡な大地に見えるが決してそうではない。国民の生活にはカースト制度による階級格差、経済格差が大きく、富裕層と貧困層が歴然としている。

農民が就業人口の80%（20年前は90%）以上の農業国であるが、人口は中・北部つまり、高山地帯や丘陵地帯から南部のタライ平野に向かって移動する傾向と農村部から都市部への流れが認められる。

これは地形、気候両面で有利な平野部で農業を営もうとする動きであり、山岳地帯での耕境の拡大が困難になっているためである。

マラリアの蔓延地帯で猛獣の棲むジャングルは今日ネパールの穀倉として水田や野菜が卓越した農業地帯に変化した。

中間部の丘陵地帯の歴史は古く、農産物の種類も多い。米の生産力はタライの低地帯を上回る。

北部の高山地域はおもに牧畜だ。人口は少ないが、チベットからの流入人

口が多い地域を形成している。今日では人口の増加に伴いなお農業地帯が拡大している。

ネパールの人口は 20 世紀初頭から約 1 世紀の間に 560 万人から 1850 万人と 3 倍以上に増えている。農村も都市も人口が溢れている。この人口爆発現象は発展途上国の共通した悩みだ。

人口は増えるが就業の機会に乏しい。

主要産業である農業の近代化の遅れは何に起因するのか。この問いを解かなければならない。

ネパールに足を踏み入れてみると様々な発見、奇妙な光景、複雑な文化混淆に眼や耳を疑うことすらある。

この国は同じように小国で山岳国のスイスとあまりにも状況が異なる。その背景は何であろうか。という疑問にも応えなければならぬ。世界の地域のなかでも一見風変わりな、本質の見えにくいネパールを少々紐解してみたい。

2. 山岳国ネパールとスイス、格差の背景

アルプス山脈を国土の 3 分 1 もつスイスが面積では北海道の半分、ヒマラヤ山脈やそれに付随する丘陵部を半分以上もつネパールが北海道の 2 倍弱の 2 つの小国が大変興味深い共通点と異質点を持ち合わせている。1 人当りの国民総生産で比較すると、スイスは世界の最高位の 4 万 3 千ドル(1997)、ネパールは世界最低位の 210 ドル (1998) である。国民所得比率もこれに連動している。国連開発計画^(註2)によると、南アジア、東南アジアとアフリカを中心に地球上には 12 億人以上の生活困窮者がいることになっている。ネパールもその 1 つだ。そしてネパールでは全世帯の 53% が貧困地帯で、日常の食生活にも事欠く状況であるといわれているのだ。

自然条件もよく似た 2 つの国、両国とも山岳部は高山性の気候、平地は温

帯もしくは亜熱帯だ。小国であるだけでなく双方とも多民族国家である。スイスは4言語が公用語であるのに対して、ネパールの民族は50以上もの言語があるといわれるほど複雑だ。ネパールでの言語はネパール語が公用語であるが、タマン語、ネワール語がマイノリティー語が上位をしめ、これらの言語をネパール語とする見解も表れている。宗教もインドの影響でヒンドゥーが多いが、ラマ教やイスラーム教もあなどれない存在である。こうした文化の混淆がめだつが、この2つの国は不思議に民族間の矛盾が表面化しないことに共通性がある。

両国とも小国であるにもかかわらず複数民族、複数言語、複数宗教の地図を有していながら紛争や衝突にならないのである。隣国との矛盾は歴史の節々にあってもそれを取り込んでクッションの役割を果たし、言語の違いと少数民族問題を巧みに解決しながら融和思想を育んできたようにみえる。

19世紀ネパールを支配していたシャハ王は、「インドと中国の巨石に押しつぶされそうなヤムイモ」という意味の表現をしていたと前述したが、両巨大国の圧力を受けながらもネパリの人々はインド人とヒンドゥー教、チベット人とラマ教の相互乗り入れの橋渡し役を演じてきている。

スイスは、北はドイツ文化圏、南はイタリア文化圏、西はフランス文化圏と棲み分けがしっかりできていてこれまた融和がとれている。似たような境遇、自然条件、社会条件でありながら世界の最富国と最貧国が何故存在するのか。何故こうした格差が生じているのか。

アジアの最貧国といえば、ネパール、ブータン、ベトナム、モルジブなどの南アジアないし東南アジアの国々である。

多くのアジア諸国は第2次大戦前イギリス、フランス、オランダなどの植民地支配下に置かれたが、ネパールは直接的支配を免れている。イギリスは植民地支配のためにインド側からネパールに軍を進めたこともあったが、険しい山岳地帯での戦闘が思うにまかせなかったことや植民地的資本市場ないし資源などに恵まれず旨味が乏しかったなどで併合や占領を諦めたとする歴

史分析もある。

もう1つは第2次大戦後、王政復古で国王に権力が集中し、独裁支配が確立したことである。選挙は間接制で民意が権力に伝わりにくい構造ができあがり、政党政治も禁止された。少数派の宗派の人々、つまりマイノリティの言語も制限されたのである。ネパール語を統一した言語に使用とする動きは、王政を支え単一言語で国家を統制しようとする高いカースト階層の考え方でもあった。少数民族にとって固有の言語が制限されることは、彼らにとって経済的・社会的に不利になることは明白である。多言語国家として内外ともに認められたのは1990年の民主化以降で、わずか10数年前のことだ。

スイスは第2次世界大戦時、日独伊三国が軍事同盟を締結したため、スイスではこれらの国の軍隊が自由に往き来するなど国土は踏みにじられた。しかしスイスは中立を標榜してこれを無視する。

山岳地帯を対象とする観光・保養産業も両国の特徴である。ただし、スイスは第2次大戦前からアルプス山岳の観光産業に乗り出し1世紀に及ぶ観光経験を有するが、ネパールのヒマラヤ山岳観光が本格化するのは1970年以降と最近のことである。

違いといえば、スイスは産業革命後早くから産業構造を2～3次産業に転換していく。農牧業産品は加工して付加価値をつける、精密機械など軽簿短小型内陸工業の振興や国際的金融業の基地の性格を持たせ世界金融の軸を形成するのである。

農業など第1次産業人口がスイス5%弱、ネパール80%は国の産業構造、産業別人口構成の決定的差異とわいていい。

国民の8割が農牧業に従事するネパールでは農畜産物の加工すら困難である。

しかも、一人あたりの耕地面積は0.3 ha、これは日本の4分の1、スイスの7分の1と零細である。

ネパールはスイスのような機械化や施設化による近代化は進まず、畜耕と人

力を生産手段とするの農業様式が一般的である。土地利用状況を見ると「耕して天に至る」で水路敷設可能な斜面は「棚田」、水田造成が不可能な斜面は「段々畑」を基軸にした農業で穀物を主要耕作物とする。山岳斜面の牧場利用や果樹栽培地域はスイスのように多いわけではない。

谷底平野や低平な丘陵地も水田と穀物畑がドミナントな土地利用形態である。

機械化が遅れているため区画は小さく手作業型圃場であるから、畦なども直線的でない。ちょうど、1960年代の日本の農業構造改善事業以前の状況によく似ている。

ネパールの土地利用は集約的であるが土地生産性は低い。土地所有も零細であるから当然労働生産性はあがらない。二毛作が一般的だといわれるが、乾燥期（冬期）の休閑地を多くみかける。水田の裏作はトウモロコシ、大・小麦、野菜、ジャガイモが多く、畦畔や耕地のつなぎ目のわずかな空間にバナナやパパイヤが植えられている。

この地域は米、ジャガイモ、小麦など穀類、それに根菜類、牛乳、牛体の畜産物は換金作物、商品家畜であるが、バナナ、野菜それに米、小麦の一部は自給用に回される。

インドに近いタライ平野は広く米作地帯が卓越する。丘陵部や山岳地帯はジャガイモ生産ができるから焼畑農業の中心作物であるヤムイモ、タロイモ、キャサバは耕作されていない。生産力からいっても、汎用性からみてもジャガイモは遙かに勝ったでんぷん質食品なのである。

もう1つは灌漑施設普及の遅れである。「南アジア灌漑効率の比較研究」^(註3)によればビハイラハワ・ランビニ・グランドウオーター事業で灌漑する前と後での土地生産力の差が表されている。それによれば灌漑事業実施によってそれぞれヘクタール当たり米は2.6倍の2.8トンに、小麦は3.8倍の2.2トンに、サトウキビは3倍の73トンに上昇している。それでも日本の米のヘクタール当たり6.2トンには遠く及ばない。近代化の必要性が叫ばれても灌漑

施設構築の資金が決定的に不足しているからである。

まだある。1960年代はネパールは貧しいけれど食べることは事欠かないといわれてきた。食糧自給がある程度可能だったのである。ところがこの時期から40年間に人口は4倍以上の2100万人に増加し、過大な耕境拡大と土壌浸食で可耕地が急減する狭撃現象に見舞われている。

スイスの土地利用は一定の法則性に貫かれている。国土の3分の2を占める平地部分は穀物と家畜を組み合わせた混合産業（ミックストファーミング）、そして斜面やアルプは牧畜と果樹栽培であり、土地利用に高度化がみられる。高度に機械化が進んでいるほか、年々灌漑施設が装置化されてきている。山岳斜面は乳牛や羊、肉牛の放牧で相変わらずトランスニューマンズの季節移動だ。家畜も放牧できないさらなる急斜面はブドウ栽培で土地利用の有効比率を高めようとする。

スイスの移牧に似た風景をネパールで見ないわけではない。

2,000 m～3,400 mの山地では、家屋は定住用でなく、夏の間だけ放牧用に使われるネパールの事例として、トニー・ハーゲン^(註4)はドール・パタン地区、ジウムラ盆地、ヒュンチュリ山地をあげている。

スイスは日本やオランダと同様、多くの作物、穀類、野菜・果樹の部門で国内自給できない状況にある。

しかし、有事食料対策はしっかりしている。つまり、国境が封鎖されて外国からの食料供給が不可能になり、国民が窮乏したり、餓死したりする前の政府緊急対応策である。これは「食の安全保障」と呼ばれるものだ。

スイスでは牛や羊を飼うこと、つまり畜産が耕作農業と組合わされている混合農業を基幹に据えている。アジアの多くの地域にみられる耕作偏重の穀菽農業スタイルと比較して、混合農業は農業労働の周年化を可能にし、農畜産物の販売収入も周年化する。食料と飼料作物の組み合わせも畑地の利用に輪作体系を組み込み易い。それに3つの食料備蓄機能があるとスイス政府は考えている。

第一は、家畜は食肉生産を目的にしたものであろうとなかろうと、いつでも屠殺すれば人間の食料になる。アジアでは宗派によって食料にならない家畜がいるがヨーロッパ地方はそうした考え方が支配的でない。家畜は生きたままの在庫、つまり live-stock なのである。

第二は、家畜を飼うためには餌の生産と貯蔵が必要である。乾燥した家畜ビート、飼料用トウモロコシ、飼料小麦などはいつでも人間の食料になりうる。こうした飼料を生産し、貯蔵しておくことは有事の人間の食料対応として有効である。

第三は、スイスは家畜のための放牧地、野草地が国土の 28% に及んでいる。

この 115 万ヘクタールは、北海道の半分の面積に過ぎないスイスにおいて北海道の耕地面積に匹敵する広さである。こうした耕地外農用地は、いつでも耕地に転換すれば食料農産物の生産が可能になる。林地よりも草地の方がいざというときに耕地化しやすいし、政府の権限で土地利用の変更ができる法例さえ用意されているのである。

当たり前のことだが国家に国民の生命を護る思想が貫徹しているところに生産力の高さと国民所得の上昇が可能だということが理解できる。

ネパールでは、国民の 90% がヒンズー教を宗派としている。隣接国インドの影響が強いのだ。

この宗教にはカースト制が存在する。これは四姓の間に歴然とした階層・階級を存在させ、通婚や共食の禁忌、カースト職業への忠誠など四姓間の差別を日常的なものとしているから、上位のカーストが下位のカーストに属する人々の命を護るといった発想は生まれにくい。

肉体労働が農業生産力の中心であるネパールは、子供は働き手であるし、老後の親の面倒をみるから子孫の多産は必然的なものとなる。経済的な貧困は子供の多産を拒めず、逆に多産が貧困を激化させる。この国の農山村部を歩いていると子供が溢れている感じがする。ケニヤやタンザニアでも同じ光景に何度も出会った。まさに人口爆発の状況だ。

ネパールでの山岳地帯も平野部も農業における機械化はほとんどみられない。畜力や人力が生産手段の軸で農牧業が行われている。堆肥は利用するが化学肥料はほとんど使われない。これは化学肥料や農薬づけの農畜産製品を生み出す先進国農業に比べればうらやましいかぎり環境条件であるけれども土地生産力の極端な低さを克服する方策とはつながらない。品種の改良、機械化・近代化によって土地生産力をあげようにもそのための予算がない。技術的にも近代化の道筋は厳しい。

灌漑施設構築の予算づけがなされても、施設ができないのに予算だけは消化されてしまっているという話もよく聞くところだ。役人天国ならではの国の状況である。

土地所有は一戸当たり 0.3 ヘクタールと超零細である。日本の農家の 4 分の 1 であるが、日本のように兼業農家が大半であるということはない。兼業機会が乏しいため兼業収入獲得の道が閉ざされている。ネパールでは農畜産物の販売収入以外に現金収入の道はほとんどない。零細でありながら専業農家の比率が高いのである。

零細再生産構造のネパールでは離農して街に流れ出す人口がさみだれ的に続いている。兼業収入を求める農業者は多いがその機会に恵まれないから離農してより大きなそして安定した現金収入を求めて街に人口が流れる。しかし街の就労環境は決してよくない。それらが非就労者として街に滞留するのだ。

最近のヒマラヤトレッキング客の流入は、鹿野^(註5)によれば外国人入国者の 20% を越えているからガイドやポーター、コックなどの登山協力者の就業先は増えつつあり、コース近隣農村の兼業機会としてはいい収入源になっている。こうした職業に対する人的資源の供給力は豊富であるが、人材を利用するマーケットはあまりにも小さい。

農業生産力の低さは、農業就業人口が 80% もいるのに国民総生産に占める農業生産は過半に達せず、非農業の割合がより低くなっていること、そして

国民総生産の成長率は全体が4%程度になっているにもかかわらず農業は2%と伸び悩んでいることでも証明される。

ネパールは米の生産が主体の農業で成り立っている。ヘクタール当たりの米の土地生産量は平均2トンと日本の3分の1に満たない。日本だけではない。エジプト、韓国、スペイン、中国ですら6トン以上を収穫する昨今だ。小麦など他穀物でも1トンから1.5トンで日本の半分以下、エジプト、フランス、ドイツ、イギリスの4分の1以下の低さである。インドに近いタライ平野や点在する盆地底部分を除けば、耕地の多くは傾斜地で棚田か段々畑だが、その規模は「耕して天に至る」信州の蝦捨山の棚田や四国地方の段々畑の比ではない。

急な斜面をはぎ取り、石垣を垂直に築いて畦をつくる。素朴な灌漑水路が走っているところは水田とし、水の供給が不可能な地域は段々畑である。

急斜面で仕事能率は極めて悪いし、斜面は砂礫地や岩盤が多いから農作業能率もあがらない。土地生産力を高度化するにも限界がある。

大地主の土地を開放し土地なし農民（スクムバシー）に農用地が分け与える農地改革は1990年の民主化以降も実質的に進んでいない。土地の所有と耕作権の不一致は生産力の発展を阻害している。

地主制度は20世紀初頭までカーストの上位に属する王族、貴族、僧侶、公務員などに給与のかわりに一定の土地贈与があり、かれらは序々に土地所有規模を増やしていった。政治家や高級公務員などで都市に住む不在地主層が農村に所有地を少なからずもっているといわれている。

第二次大戦後、土地改革で所有の上限が決められたが、地主から土地なし農民への所有権の移行は遅々として進んでいない。

ケシャブ・ラル・マハラジャン^(註6)によれば、「2ヘクタール以上の農地を所有する農家は全体の11%にすぎないが、全農地の42%を所有している」。富裕層、地主層と貧農、小農の格差こそ問題である。小作人や農業労働者も極貧の状況におかれている。

土地改革委員会が土地所有の平均化を唱導してもなかなか実現しない。

灌漑施設の整備に伴う農業用水の供給が農業的土地生産力を驚異的に増加させ、農家収入を増大させることはよく知られている。ネパールはこうした農業的インフラの整備が遅れている。雨期は必要以上の雨に悩まされ、乾期は極端な水不足で穀物や野菜生産に支障を来す。インフラ整備のための資本が不足しているからだ。

他方、スイスは平地だけでなく山岳地帯にまで灌漑施設が張り巡らされていて水供給のコントロールが行き届いていることである。幾種類ものスプリンクラーが夏期の水蒸気蒸発量の多い時期、耕作地に灌漑用水を供給している情景は昔からあったものではない。スイスでも 1970 年代以降整備されていったものである。

農産物の流通ルートにも違いが明瞭である。ネパールはコールドチェーンシステムが未整備であるから、野菜など鮮度が急減するものを広域流通させようとしてもかなり難しい。狭いマーケット、ローカルな地域で物資循環がおこなわれる市場構造である。米は巡回商人が庭先買いを行い、それが卸売り商人の手に渡り、精米業者を経て消費者に届く流れになっているし、じゃがいもでも卸売り・小売り・消費者のルートは変わらないが、基本的には流通の枠がローカルマーケットに委ねられているとっていい。

スイスは言語ですらドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語と 4 つの文化圏に分かれていながらどの地区に出向いても農産物の小売り価格に変化がない。スーパーマーケットや小売店の農産物商品価格がほぼ均一なのである。このことに象徴されるようにマーケットが全国一本化しているほかヨーロッパ共同体と深く結びついた市場が展開している。

スイスには生産力が高まる構造が存在し、ネパールは逆に貧困を助長する構造があることに気がつく。

それに、最近ではネパールの土地価格が高騰している。観光にかかわる産業で資金を稼いだ人たち、外国での出稼ぎ送金を得た人たち、外国からの経済

援助（歳出の30%は海外援助といわれている）に関係する人々などが豊富なルピーを投入して土地の買い占めを行っているのである。特定の階層に土地が集中すると、農業を基幹産業とする農民の土地は不足気味になる。

スイスとネパールの2つの山岳国、そこには秀峰が多く、20世紀には両国とも登山ブームを引き起こし、観光客や保養客の流入が国の経済を支えるようになってきている。

そしてガイドやポーター、コックとしての職にありつく登山支援部隊は、スイスでは現地の山岳地帯でトランスヒューマンズ（移牧）を行う牧童達、ネパールでも山岳地帯で農業や牧畜を行っていたシェルパ族らであった。シェルパ族は家畜を夏数か月間、山間牧草地や、その上の放牧場に連れて行き、臨時の牧童小屋（カルカ）で過ごす。その標高は5,000 m近くに達する。スイス同様、雪線ぎりぎりまで利用するのである。

スイスアルプスで登山大衆化したのは1世紀前になるがネパールは半世紀前、いずれもイギリスを中心とするヨーロッパ人が先鞭をつけたのだ。

3. ネパール農業と畜産の課題

ネパールで農業と牧畜を切り離して考えるのは難しい。だからといって、ヨーロッパで一般的に行われている混合農業とは異なる農牧形態と比較して違いを掘りおこしても仕方がない。例えば牛の必要性は、飼育の目的が単なる堆肥造成とか、農業残滓物の飼料利用及び搾乳に留まらないからである。ネパールでは圃場の耕起、腐葉土や木の葉、肥料生産（化学肥料は少なく堆肥や糞尿が一般的）・飼料生産（山岳地方では冬の家畜飼料である下草や木の葉を牛の背で運ぶ）・農産物の短距離運搬手段として、また稲の脱穀、収穫物の処理、水の汲み上げなど牛は欠かせない存在である。山岳地帯では乳製品や毛皮などが重要な商品で現金収入源になるが、タライ平野など稲作中心の農業地帯での畜産は農業機械に代わる生産手段としての価値が高い。牛と

いってもネパールでは種類によって使用用途が異なる。南部のタライ平野ではインド牛（一般にゼブと呼ばれる）が飼育されているが、これは役牛と乳牛の兼用だ。インド牛がいないとタライの稲作農業は成り立たないといわれるほど米作りに強くかかわっている。われわれが歩いた中間地帯の丘陵域は水牛が農耕に使われている様子を複数回みている。2頭曳き鋤起こしに利用していて、現地ではバッファローと呼んでいる。川喜多^(註7)によると、水牛は角の断面の丸いインド水牛の流れをくむ牛できゅう肥生産用ない乳用に飼育されるが、他の東南アジア地域のように農耕・運搬・乗用に利用されることはいたって少ない、と書かれているのだが、ネパールも地域によって牛の種類も役割も異なっていて不思議ではない。チベットにはヤクという多毛種の図体の大きな牛がいることはよく知られているが、今日ではヤクがチベット固有の牛ではない。アメリカのウイソコンシン州のミノン（マイノン）で飼育されているヤクをみたことがある。

ヤクはチベットでも、北ネパールの山岳地帯でも重要な家畜で地形的に悪条件の山道や寒さ、水不足や飼料不足など逆境に強いことで知られている。ネパールのヤクはチベットの南下によるネパール地域定住に伴って移動してきたものと考えられている。

カリガンダキ川を遡行していると頻繁にキャラバンと出会う。そのなかで数量的に多いのはラバだ。ロバより体が一回り大きく、荷物運搬力も大きい。次が馬^(註8)である。小型で足の細い高原型の馬が利用されている。乗用にも利用されるが、荷物運搬用が断然多い。

キャラバンの引率人が馬に跨っているケースは時々見かけるが、断崖上の山道や揺れる吊り橋を馬で通過することは至難の技に見えて仕方ない。純粹のロバはあまりみることがなかった。牛が運搬用に利用されるのは平地のことで、山岳地帯でも力があり荷量も多く運搬できるが、歩くことが遅いため敬遠されているようである。

ネパールは国土は小さいが、高度に著しい変化があるから気候や土壤の違いが歴然としている。従って農作物の栽培も多岐にわたり地域的变化が明瞭である。

耕地面積は300万ヘクタール、うち50%は水田地帯、穀物生産量では60%が米になっている。

北の山岳地帯に米は生産されていない。タライ地方は米が耕地面積の86%、そして中間丘陵地域は米が23%と地域の特徴がかなりはっきりしている。この国のメジャークロップといえば、米である。次いでトウモロコシ、小麦、大麦、シコクビエの順序である^(#9)。生産量では米が全体の60%、トウモロコシが15%で、その他は5%であるからこれらはマイナークロップといってもいいのかもしれない。主要換金作物には油料種子、馬鈴薯、たばこ、サトウキビ、ジュート、豊富な野菜や果樹、豆類などがあって作目選択は複雑である。

そこで農業地域をおおざっぱに区分するとすれば大きく3地域に分類できる。8,000 mの秀峰を抱えるヒマラヤ高山地域とインドヒンドスタン平原に続くタライ平野まで200 kmはない。国土が長方形であるから、北の高山域（チベット高原をふくむハイランド）、南の平野域（タライはローランド）そして中間の丘陵域（ミッドランド）と3地帯、3つのベルトに、地形区分に沿って農業地域も区分するのが一般的であるし理解しやすい。この分類は遠藤寛二^(#10)のものをベースにしてそれを補正するのがいいであろう。

北の山岳域（ハイランド）は、国土の3分の1の面積を占めているものの、人口は10%以下、農耕適地は4%にも満たない山岳域である。7,000 m以上の高峰も数多く存在する。世界にヒマラヤ以外でこうした高峰群はない。標高3,000 m以上の地帯では平地が少なく農耕や牧畜も決していい条件にあるとはいえない。住民の生業は牧畜で耕地利用が極めて限られたアルパイングラスランドに移牧に似た放牧がヤクと羊の飼育を中心に山の斜面や丘陵面で

おこなわれている。ヤクは高山牛と呼ばれ、チベット高原に多い多毛牛で大柄な牛体をしている。チベットから移動したヤクはネパールの在来牛と交配させ、生まれたのが一代性雑種のチョンリ（川喜多はゾーと呼ぶ）でこの高山域に広く分布しているのだ。一代性雑種であるが雌は受胎能力がない、といわれている。このチョンリは搾乳用として良質であることから乳製品加工に利用される。川喜多^(註11)によれば、この牛は標高 2,300 m 以上の地域で飼育されているということだ。

羊や山羊は山岳民の重要な家畜であるが、羊は標高 3,200 m 以上に飼養され、これ以下には山羊の分布が多い。

羊や山羊は、単に毛や毛皮、食用肉を調達するのみでなく、運送用家畜として背で塩、羊毛、乳製品などの荷を運ぶことにも利用されている。

ネパールには病気や瑕疵、老弱な家畜が多いのも特徴である。ゴレパニ近くでは、足が一本ない馬が道端で草をはんでいた。ヒンドゥー教は、こうした家畜の殺傷を禁じているために諸用途に供しえな動物達の生存維持は農家の労働負担となる。

高地で飼育される家畜は、周囲の環境が弱い飼料基盤であるため栄養分にも恵まれない。エサとしての粗飼料に恵まれないから体型も大きくなり、痩せ型が一般的だ。エサ不足を草、木の葉で補うから、こうした自然物の消耗も著しい。また、河川上流域で飼育されている家畜の糞尿が中小河川に流れ出し、中・下流域の住民の飲料水に影響がでているし、家畜が農作物を食い荒らす被害も後を絶たない。家畜の放牧と農作物栽培に仕切り、つまり牧区・牧柵ないのに問題がある。

スイスは牧区が牧柵や自然林で境界されている場合が多いが、ネパールはそれが少ない。

高山域は米の生産は不可能であるから住民の主食はトウモロコシ・小麦・大麦・シコクビエにならざるをえない。こうした作物であればある程度自給できるのだ。

中部山地の丘陵域（ミッドランド）は、ネパールのほぼ中央部の東西にまたがる地域、標高にすれば600 mから3,000 mの範囲でこの国の主要部分ともいえる。土地利用でいえば水田域と畑作域が混じり合う暫移地帯ということになる。

中部山地は小盆地、河川谷など狭い沖積地が多く、人口はネパールのやや半分がこの地域に住む。家畜の放牧も見られるが換金作物の穀物、野菜栽培が優越な地域だ。首都のカトマンズや観光の街ポカラはこのミッドランドに属する。

この地域は国の主力農業生産地帯といわれてはいるが、土地生産力は必ずしも高くない。

農家の財産（土地）相続の度に、土地が細分化され、経営規模が零細化する傾向があり、農民はさらに標高の高い傾斜地を切り開くことにならざるを得ない。米の栽培が可能なのはこの地域で標高1,900 mまでだといわれている。いわゆる米の垂直的栽培限界である。

我々の歩いたタトパニからナイヤプールの間で、シーカ（1,920 m）とゴレパニ（2,855 m）、ウレリ（2,073 m）では水田をみることはなかった。水田限界を過ぎると、トウモロコシや粟、ジャガイモや大麦などが栽培され、この地に住む人々の主食も変化して、こうした穀類が主力になる。そのほかには大根などの根菜類、バナナやマンゴーをみることができる。こうした作物の栽培地は傾斜地であるというだけでなく圃場区画が極めて小さい。

タトパニ（1,189 m）の街はミカンが収穫前の最盛期を向かえていたが、ミカンの原産地はネパールだとする説がある。いわゆる温州型ミカンでなくオレンジ系のもの、夏ミカン系のものである。ここはカリガンダキ川の谷底沖積地であるが水田の卓越度は高い。やはり標高1,900 mは水稻の栽培限界であろうかと思われる。

牧畜も高度によって異なる。トニー・ハーゲン（前掲書）は、中部山地の低地溪谷で飼育されているのが主に水牛、標高1,400～2,400 mはネパール

牛, それ以上ではチベット多毛牛ヤクである, と述べている^(註12) が牛も標高による棲み分けができてきているのだ。そして, 水牛は夏の間, 標高 3,000 m 以上の草原で飼育されることさえあるという。

夏期と冬期, 牛などの家畜の飼育場所を変えるやり方はスイスの移牧 (トランスニューマンス) に類似している。

農業人口が増加し, 耕境が高さと斜度のきつい斜面に向かって拡大すると段々畑や棚田の条件は悪化し, 労働条件は厳しくなり, 土地生産力も悪化する悪循環にとりつかれる。

中部山地 (ミッドランド) における耕種作物の栽培内容ではトウモロコシが 35% で, 米の 32% を上回っている。次いで小麦が 16%, シコクビエが 10% であり, この地方の主要作物はこの 4 種であることがわる。(Agricultural Statistics)^(註13)

混合農業とはいえないが穀物・コーンが主力の穀物農業だ。

この地域の換金作物は馬鈴薯で全作物の過半を占める。馬鈴薯がネパールに導入されたのは 20 世紀初頭と考えられているが, ヒマラヤ登山隊を通してシェルパ族が栽培したという説とチベット系住民が北から持ち込んだとの説がある。^(註14)

標高が 2500 m 以上の丘陵部は夏作として, それより低い地域は冬作として栽培されているが, 種子馬鈴薯は高山域のものが重宝されている。

ポカラ (セチ川谷) やベニ, タトパニ (カリガンダキ川谷) の谷底部や段丘面ではネーブルオレンジや夏みかん, ポンカンのような柑橘類がみられた。3 月が結実の時期である。

プラムやナシ, 桃の類もあると聞いた。こうした果物の分布はやはりタライ平野 (ローランド) のものと異なっている。

南部の東西ベルト (ローランド) の主要部分がタライ平野である。ここはガンジス川の沖積地でインドの一角をなしている。19 世紀までは開発が進まず, 熱帯雨林 (ジャングル) の繁茂, マラリア病の蔓延, 猛獣の棲息域で定

住民の少ない地域であった。20世紀になってジャングルが切り開かれ、猛獣もマラリアも退治されて広大な水田地帯、稲作平野に変わった。水田密度の高さは中部丘陵地域と比較して濃密になったのである。

ガンジスデルタ下流域のジュート（黄麻）やサトウキビがこの地で栽培され、豊穡な農村地帯になったためネパールの中・山岳部やインドから開拓移住者が増加し農村人口が急増する。タライは商業的農業が発達した地域で自給作物より換金作物に生産主体がおかれているのが特徴である。おもなネパールにおける換金作物のタライの占有率をみると、サトウキビ 92%、たばこ 98%、油料種子 79%、ジュート 100%で、他の地域を圧倒している。いわば熱帯モンスーン型工芸作物、原料作物地帯なのである。

こうした工芸作物はネパールでは数少ない加工農作物であり、工業用原料である。加えて主要野菜はカリフラワー、キャベツ、トマト、タマネギであり、主要果実はバナナ、マンゴー、パパイヤ、パイナップルなどである。まさに亜熱帯農業地域の作目栽培が卓越する地帯だ。そして、タライ平野で生産される農作物はネパールから他地域に移出できるほどになり、インド商人の介在を招いて農作物は外国にも輸出されるようになるのだ。

ネパールの五穀といえば米、トウモロコシ、ジャガイモ、粟、大麦であり、いずれも主食に属するもの。ローランドでも生産量のもっとも多いのは米である。米の生産量はトウモロコシの3倍に達し、その大半がタライ平野で生産されている。

ネパール人の主食は地域によって異なっている。ヒマラヤを含む山岳地帯はトウモロコシ、タライ平野は米、中部丘陵地は米とトウモロコシ、その他が混在している。北海道の2倍程度の小国で地域によって主食が異なるのは珍しいが、農作物流通が思うに任せないなど歴史的にみて自然条件とインフラの非近代化が障壁になっていたのであろう。

タライ平野は土地の40%が耕作適地だといわれている。水資源に恵まれ、土壌もいい。土地は褐色の粘土か壤土（農業最適土）からできていて、石灰

の含有もあり肥沃だ。それにネパールのなかでは際立って平地が多いことも農業、とりわけ穀物栽培に好条件を賦与している。

この地方では五穀のほか、多種類の野菜（果菜を含む）、豆類が栽培され、生産量でも他を圧倒している。

『ネパールの農業』^(註15)によると、タライ平野の米の平均収量は 1982 年まで、丘陵地帯より低かった。壊滅状態の年度もあった。1983 年以降は順調に回復し、他地域を上回るようになった。これは灌漑施設の拡充と栽培技術水準の向上によるところが大きい。

ネパールの米の反収は 20 世紀末（F A O 資料・1999）になっても 2.45 トンで日本やヨーロッパ、地中海沿岸諸国の 3 分の 1 程度と低生産力地帯に変わりなく、それ以上に年度による生産量のバラツキも多く、安定的な米の生産と供給状況になっていない。トウモロコシも似た傾向にある。それに対して小麦は安定性があるし、特にタライ平野の生産力は高い。

米生産に年次バラツキが目立つのは年度別降水量の多少と関係があるのではないか。灌漑施設が未整備で水のコントロールが難しいのだ。小麦はその点異なる。もともと乾燥地帯に強い作物であり、施肥技術や品種改良で生産力増強は見込まれる。

最近の ASEAN 諸国など東南アジアでは緑の革命が進行し、穀物を始めとする農作物の生産力向上に顕著な進歩が見られているが、ネパールはまだこうした技術革新が端緒についたばかりだ。適地適作、作目選択の合理性、輪作体系の創造、品種改良、化学肥料や機械の近代化が鍵になる。

一般的な降水量や日照時間よりも一次的な大雨が豊作をもたらすといわれてきた国である。水の管理、灌漑施設の充実、山岳地帯の水路整備が急務であろう。

農村人口の急増が劣悪な急傾斜地や谷に耕境を拡大していく。こうした土地条件では生産力の飛躍的發展は望めないどころか様々な自然災害が待ち受けている。土砂崩れ、地滑り、土壌浸食、森林植生の崩壊、洪水などだ。作

物栽培可能期間も不足するし、表土が洗われ土壌や養分の流失も起きやすい。事実、今回の山歩きでそうした現場に何回も立ち会った。土砂崩れや鉄砲水で耕地が流失し、道路などが破壊されて巻道ができている場所がいくつもある。

水田は畦を小石や鉄平石で土盛りし、頑強な壁で棚田を維持しているようにみえるが、崩れた跡はいくらでもある。段々畑も畦肩が弱い。

国土全体のインフラが未整備なのだから、農道や農産物輸送路の整備、灌漑施設の拡充、農業技術革新をうたっても無理がある。

だからといって、この未開、未整備な上に豊かな自然があり、自然食品が生産されている地域が、一挙に近代化路線を走り、近代的通信網や道路、高速鉄道などで狭い国土をネットワークしたことや、化学肥料の多投で生育する作物のことを考えてみると、それはそれで環境保全や人体の健康維持のうえでどんなものかとの思いになる。

4. ガイドはシェルパ族とグルカ族、ポーターはタカリ族

カトマンズではシェルパ族のダワ・シェルパが我々の案内役を務め、トレッキングはグルカ族のラム・バートルがガイド、そしてポーターはタカリ族のキム・バートルが担当した。

ダワ・シェルパは、日本の山岳ツアー会社「ノマド」のカトマンズ支社長でシェルパ族だ。シェルパを苗字として使用している。

シェルパ族はネパール東北部に住むチベット系の民族で、ラマ教を信仰している人々が多いが、もともとクーンブヒマールの3,800 m前後の高地（エベレスト南麓のクーンブ溪谷、その南のソロ川上流のソロ地方、ドウド・コシ川のパーラック）に住んでいた。山岳斜面や丘陵部を利用しながら農牧業を営み、他方では中国とインドを結ぶ通商路で交易に従事していたのである。20世紀後半にヒマラヤ登山が脚光を浴びるようになるとシェルパ族は登山

客のサポートに力を入れるようになるのだ。山岳ポーターなどを一般にシェルパというのはここからきている。ただし、シェルパ=シェルパ族ではない。シェルパ族のなかで登山協力者として優れた業績と能力を持ち、ダージリンの登山学校ヒマラヤクラブから正式な登山記録帳を渡されたものだけをシェルパというのだ。最近ではポーターと区別して「登山協力者」の意味で使われていることが多い。クーンブ・ヒマールのシェルパ族は数万人がこうしたクライミング、ないしトレッキング・サポーターとして生計をたてているといわれているが、登山協力者の確かな数はわからない。この地方で立派な家屋を新築し、豪勢な生活をしているのはこうした登山協力者達だが、命と引き替えに蓄えた資金による建築物であることも間違いのない。比較的豊かな生活ができるようになったのは最近の傾向で、登山やトレッキング客の急増によるところが多いのだ。

シェルパ族が、登山協力者として仕事ができるのは、1949年の中国社会主義革命で中国側からのヒマラヤ登山が制限され、ネパール側に世界の登山客が集中しはじめてからである。もっとも18世紀にはネパールが鎖国を半世紀にわたって断行していたこともあった。だから、この時期のネパール登山はあまり脚光を浴びていない。20世紀も後半になると交通の便はネパール側の頻度が多くなり、利便性が高くなる。

ネパールへの渡航者、外国人旅行者は毎年増え続け、90年代には30万人を越えている。その20%から30%は登山客ないしトレッキング客、あるいは山岳関係者であると推定されている。彼らはクーンブ・ヒマールだけでなく、ランタン・ヒマール、アンナプルナ・ヒマールと分散して山岳地帯をサポートして歩く。カトマンズから振り出されるシェルパ族の協力者はどの山岳域でも見かける広域的山岳活動部隊なのである。

日本人や欧米人のヒマラヤ登山はシェルパ族によって担われ、登山隊を形成してきている。現地で調達したポーター達が山で必要な物資を荷揚げし、クライマーはガイドの支援のうけて登頂を目指す登山スタイルが一般的に

なっている。エベレスト（中国ではチョモランマ、ネパールではサガルマタと呼ぶ）やダウラギリなど 8,000 m 級には 40~60 人で 1 部隊を構成すると案内役のダワ・シェルパはいう。

ガイド・ポーター・コックなどを現地で調達する方式は、欧米人がアジアなど探検するときの遺物で「植民地型登山」などと呼ぶ人もいる。

この登山方式はアジア地域のみでなくアフリカのキリマンジャロ山やケニア山、南米や中米の山岳登山でも行われている。現地での運搬人の雇用費用が欧米人や日本人にとって極めて低額であるからだ。山岳地域への入山料・入園料をみてもネパールのアンナプルナ地方では 5 泊 2 人で 28 米ドル（3,500 円）である。タンザニアのキリマンジャロは 6 泊 1 人で 100 米ドル（12,500 円）とやや高額だが欧米人には決して高いとはいえない。ネパールでは地域保護費といい。タンザニアでは国立公園入山料と呼ぶ国税である。

さらに近年は登山というより高山を見ながら山中を歩くトレッキングが大流行でシェルパ族の働き場は一層増えた。シェルパ族は勇敢で命知らずの民だとの評価もあるが、逆に従順で寛容な民族であるとの見方もある。

ベニからタトパニを經由しナイヤプールまでのトレッキングガイドはグルカ族のラム・バートルであった。

19 世紀初め、英印軍が南ネパール 5 方面から攻める、いわゆる「グルカ戦争」があった。英印軍は山岳地帯の地形に精通していたグルカ兵の強力な抵抗で苦戦を強いられた後双方が停戦に追い込まれた戦史がある。この時、英印軍は捕虜のグルカ兵を再編成してアジア植民地支配の忠実な兵士とし、イギリスに忠誠を誓う軍隊に育てたのだ。

さらにグルカ族を有名にしたのは、19 世紀中頃の「セポイの反乱」でイギリス軍に加わりインド軍との戦いで輝かしい戦果をあげて勇猛果敢な戦士として世界に名を馳せたことがある。最近はネパール兵士の代名詞になっているようだ。

近いところでは 1982 年、アルゼンチン沖のフォークランド（マルビナス）

紛争に数百人のグルカ族が出兵して話題を呼んだ。

一週間同行してくれたグルカ族のラム・バートル (37 歳) はネパール中部の街、ゴルカ出身である。この地方の人々は外人部隊として主に東南アジア諸国で出稼ぎをする。

グルカ兵は本来、インドを植民地化したイギリスが支配のための駐留軍に加えた軍人であるが、インド軍のみでなくシンガポールや香港でのイギリス軍として雇用されてきた傭兵でもある。軍人であるから若者、農村出身の貧しい人々が多いといわれるが、所得層で見れば中・上位層にも及んでいる。グルカ族は傭兵のみでなくインドのプランテーション農園労働者 (アッサム地方の茶園、オレンジ園労働者) やインドの道路工事人夫、建設・建築業者あるいは銀行や大商店の整備員や現業労働者として働く。

南アジア、東南アジア駐屯のイギリス軍に加われば、賃金のほかに軍服、兵舎、食料も保証され生活費はほとんどかからない。軍隊にいれば英語を憶え、家族に送金もできる。英語を憶えることは、後に山岳ガイドやポーターになるうえで都合がいい。故郷に帰れば村の仕事や教師、軍や警察などネパール人憧れの職業にも就きやすい。出世の可能性も高いのだ。

送金しないまでもキャッシュを貯めて帰国後さまざまな商売に転向するグルカ兵もいる。

ラム・バートルは「ノマド・カトマンズ」のダワ社長に雇われ 10 日間我々のガイドをすることになった。彼の仕事は山岳ガイドのみでなくポカラやベニ、カトマンズの街の案内や買い物の手伝いを行うということだった。我々には必要ない部分もある。

観光案内は不要なかわりに様々な聞き取り調査に協力していただいた。だからこのレポートはとかくラム氏の主張が識り込まれている。

タカリ族のキム・バートル (40 歳) はトレッキング出発点のベニでポーターとしてラム・バートルに雇われる。ガイドがポーターを雇うのだ。従ってポーターの日当 8 ドルはキムが支払っている。ガイドの日当 12 ドルはダウが支払

う関係になっている。

キムとラムは苗字こそ同じであるが生まれた場所も民族も異なる。キム・バートルはベニに近いカリガンダキ川の山村に住む貧農であったが今日では妻とともにこうした副業を正業にして生活をたてている。妻は行商を行っている。丁度我々がベニからカリガンダキ川を北上していたとき、ベガコーラ集落付近で休息しているキム氏の妻君に出会った。彼女は上流のタトパニから荷役運搬の仕事を終えて川を下って来ていたのだ。

歩いて物を運ぶか、ロバや馬の背を借りて運ぶかしかないカリガンダキ川沿いの山道は古くからインドとチベットを結ぶ通商路として発達したものであるが、その役割はいまも昔も変わらない。食料、生活用品などの荷は相変わらず家畜の背か人力で運搬する。

川沿いのベニ周辺に住むタカリ族は商業、貿易に関連した仕事で生計を立てている人々が比較的多いから、山奥の地域に居住生活しながら、国際化が進むように見受けられる。

5. カリガンダキ川とタカリ族

ポカラから西にプリテレビ・ハイウェイを走る。舗装されているとはいえ舗装部分は1車線。それもナイヤプールを過ぎると未舗装の荒れた道になる。人間の歩く速度とさほど変わらない車速、危険極まりない崖筋の山道を車が通過するとベニの街だ。

カリガンダキ川^(註16)沿いにあるベニは小さな行商中継地であり、宿場町の性格をもつ。

街の入り口に検問所があり、おもりで上下動するバーが下ろされている。係りの人がチェスに興じているから、小学生程度の子供がこのバーを上げてくれる。これではたいして検問の役割を果さない。その付近にたむろしていた若い青年2人がいきなり車の窓をめがけて粉末の入った袋から紅がらのよ

うなものを開いていた車の窓から中に投げ込んだ。急いで窓を閉めようとしたが間に合わない。車内は赤い粉末で全く見えない。かれらの顔や衣服もまた紅色で赤く染まっている。丁度、土曜日が休日で「村祭り」なのである。車が走り始める。車内の顔や衣類は赤粉末で誰もが紅色の変色した。小さな川にさしかかり人のいないのを確かめて顔を洗う。衣類は仕方ない。

車が市街地にはいっていくと大人も子供も赤粉末の入った袋をもってお互いに紅粉をかけ合っている。これが村祭りのスタイルなのだ。窓を開けられないし、車を止めることも難しい。なんとか運転手が降りて赤粉末をもった集団に“遠来の客に紅粉を投げるな”と説得する。

行き止まりで車を降り、川に架かる長い吊り橋を渡るとベニの市街地がある。ここから上流はもう自動車で行くことはかなり難しい。

夕方であるが穀物袋を背負わされたラバのキャラバンが通り過ぎて行く。10頭程度のラバを1人のムチを持った若者が引き連れている。多分、川の上流でヒマラヤ山中のムスタンかジャムソン方面からきたのであろう。この街は隊商路の終点に当たるから商店街も自ずと御宿や生活必需品を売る店、食堂やチェス遊びが出来る遊技店が軒を並べる。

宿は市街地のなかでは際立って立派な庭をもつ4階建ての「ホテル・イエッティ」だ。

ここはダウラギリ山(8,167 m)の登山基地になる街で、「イエッティ」は登山隊を編成する重要なホテルであるという。宿泊客のなかには欧米系の顔がある。

ホテル経営にあたるガウチャン夫妻は英語も流暢でてきぱき行動する。酒の飲みっぷりも豪快であるが、人の面倒見がいい。特に女将のビマーラ(40歳)は登山隊編成の中心的役割を常に果たす。

イエッティとは、世界の屋根ヒマラヤ高地に棲む生物であるとの話題で世界に知られている。生体不明の足跡を見た人々が複数いて評判になったのだ。雪男ともいわれ、人間をむさぼり食ったり、さらったりする恐ろしい生物で

血も肉もあり足跡を残すというのだ。こうした伝説っぽい話がこの地域でまかり通っている。その「イエッティ」なのだ。^(註17)

夕方、2 km 川の上流の広場で祭の集大成行事をするというのでガウチャン夫妻やその家族と一緒に出かけしてみた。カリガンダキ川は、ベニ付近から上流にかけて両サイドが1,000 m以上に及ぶ深い幽谷を形成しているので太陽が没するのは早い。暗くならないうちに祭りを終了させるべく会場に急ぐ人々の列が続く。平坦地もほとんどない緩い傾斜の広場に辿り着くには2 km も歩かなくてはならない。

ここにはタカリ族が100人程度集結していた。老若男女が入り乱れ、車座になって酒やビールを酌み交わしている。これも村祭りのスタイルであろう。

紅色の赤い粉末をかけ合った人々は顔、衣装、髪の毛から靴まで紅色で異様な出で立ちに映る。

広場の斜面では弓道大会がおこなわれている。和弓とも洋弓ともいえぬ古風な弓が板を立てただけの標的を狙う。弓は持参している人によって長さが違う。1 mから2 mとまちまちだ。標的の高さは1 m 80 cm、幅は40 cmで厚さ5 cmの長方形の板だがそれを土に埋め込んであるのだ。子供も大人も大会に参加しているがここには女性の姿はない。男性が群がって競技を楽しんでいる。これは、古くから山岳地帯で狩猟をしてきた伝統的・技術的な成果を競うものだ。

よく見ると車座の中心に白人の観光客がいて音頭をとり、踊りを披露しているグループがある。簡単に欧米人のゲストを祭りに誘い込むタカリ族、ベニの人々の商業活動で鍛えた国際性を覗きみることができた。

女の子達はショールを肩に巻き付けるか、頭にすっぽり被っているものがめだつ。一様にとはいわないがイスラームの女性に似た出で立ちであるが、顔をすっぽり隠すことはしない。成人女性はゆったりめのブラウスと腰巻きのような長めのスカート、首飾りやブレスレット、イヤリングなどの装飾品を身につけている人が多い。男性は一般的に欧米人の服装だが、独特の民族

衣装の帽子をかぶっているにも拘わらず、はきものは洋物の運動靴といった姿の者もみかける。

集まった人々の顔を見ていると彫りの深いインド系、日本人を思わせるチベット系、パキスタン以西のイスラーム系の顔がある。ガウチャン夫妻はどうみてもチベタンだ。異民族の交流地域ではあるが、タカリ族はとても純血人種で構成されているとは思えない。丸顔、低い鼻、出張ったほお骨、細い眼、やや黄色みを帯びた皮膚といったモンゴロイドの形質を有しているし、タカリ語もチベット＝ビルマ系の言語であるといわれている。

彼らは、チベットの塩をネパール、インドに交易させる権利を得て、排他的・独占的に利益を上げてきた広域商業集団だ。そうして蓄積した商業資本を背景に金貸業、土地不動産業、店舗やホテルの経営などに手を染め、ポカラにも移動して観光事業に乗り出した人々もいる。事実、ベニで「ホテル・イエッティ」を経営するガウチャン夫妻は2002年にはポカラに大きなホテルをオープンさせるといっているのだ。

地形的にも気候的にも厳しいチベット系の住民にとっては標高1,000 m前後の谷底でもヒマラヤ南斜面のネパール中部山地は天国だ。チベット側に比べれば気候条件はかなりいい。チベット系住民の南への移動は中世ごろから始まっており、溪谷沿いにネパール側へ移住するが、ネパール人の住む平野部までは降りてこない。

一定の棲み分けが成立している。これはカースト制度と関係があるのだろう。カーストの仲間入りは難かしいからだ。チベタンは東のクーンブヒマールにはシェルバ族、西部ヒマールのボテイヤ族、そのさらに南にカラガンダキ川沿いに定着したタカリ族などと棲み分けた。ビスタ^(註1)によるとタカリの故郷は、アンナプルナとダウラギリの間の谷、カリガンダキ川を詰めて行くと国境山岳地帯にチベット仏教とインドのヒンドゥー教の移行地帯があり、そこをタッコラと呼ぶが、ここから南下移動したものらしい。多湿の亜熱帯植物地帯と乾燥したチベット高原の接点のようなところだ。

このなかでボテイヤ族は主稜山脈の北側の地域（地形的にはチベット高原のネパール領内になる山間奥地の溪谷）に住むが、タカリやシェルパは、川の溪谷沿いに定住したといわれている。

酒を酌み交わし、歌をうたい、踊りを楽しんで、弓を射る、そんな素朴な村祭りは1時間半程度で流れ解散、暗くなったカリガンダキ川縁のでこぼこ道を仲良くなった村人と喋りながら帰途についた。ここでも驚いたことに英語を喋る村人が何人もいることだった。

カリガンダキ川はベニから上流タトパニ、ツクチェ、ジャムソン、ムスタン王国を經由してチベットに到達するコースとしては、峠の高さが緩く、道もかなりしっかりしていることで南北を結ぶネパールの通商路のなかでは古くから利用度が高いコースであった。

ツクチェは「塩の交易地」を示すチベット語であり、その北に隣接するジャムソン、さらに北でチベットとの国境に近いムスタンにはずっとタカリの集落が分布している。そのなかで交易の中心はツクチェであり、タカリ族は北の塩と南のそば、小麦、大麦、トウモロコシを交換する。彼らはタカリ以外にも物資輸送の労働力を地元で調達し、物資輸送の任に当たさせた。そのため政府から地方行政権の一部を委託され、法番人役、徴税役、地域紛争処理の警察的権限もまかされたといわれている。通商と貿易、山奥でありながらこうした商業活動でタカリ族は地域支配の権限をうまく使って蓄財するとともに、商業活動ネットワークの拡大を通じて近隣諸国と国際的な結びつきを強めていったものと思われる。

6. タトパニからナイヤプールの山岳地帯

カリガンダキ川沿いのベニ、朝の目覚ましは鶏の鳴き声で始まる。子供のころの日本の田舎はこんな雰囲気であったが、最近の日本の田舎は卵や鶏肉

を自給するために鶏を飼う農家もあまり見なくなっている。ホテルの前庭は広い。まだ、薄暗く外灯の下で年老いた召使いが箒で庭掃除をしている。

とても空気が旨い。太陽が昇り外気が暖められるといっそう空気の味が引き立つ。3月中旬はヒマラヤにも春の訪れを空気の美味しさで感じる。日本では味わえない独特のものだ。札幌を立ち、ソウル経由バンコクで泊まり、翌日はカトマンズ、3日目はポカラ、4日目はベニと5日目にして待望のトレッキングにありつける。日本から見て地球の裏側のブエノスアイレスやサンパウロでも2日あれば到着するのになんと時間がかかる地域であろうか。

この日の日程はカリガンダキ川を上流に歩いて9時間半、ベニからタトパニの集落まで山岳歩行だ。この山道はインドからチベットに通じる古くからの通商路である。ガイドのラム・バートルとポーターのキム・バートルそして我々2人で出発した。小林教授（北大）の申し入れで、ポーターをカトマンズで雇うことは必要ないとしてエイジェントの計画を拒否する。ポーターは現地ベニで調達することにした。小林教授は日本人に対してガイドやポーターは契約した料金以上のチップや割増料金を請求することがあるからそれを拒否すること、ルート上にはロッジや茶店があり、食事や宿泊の心配は全くないし、食事代や宿泊代は格安であること、ガイドとポーターの食事代、飲み物代はこちらで支払うが、彼らの宿泊費は支払う必要がないこと、このコースは治安はそれほど悪くないが、強盗が出没して被害もでているので、できるだけ単独行動しないこと、その他、高山病対策や山小屋、雇い人へのチップまで細かく教えてくれる。彼は山岳調査の専門家である。

カリガンダキ川付近のコースは、通称「エベレスト街道」や「ランタン・ヘランブー」などと並ぶトレッカーの最も集まる地域であるから、いわゆる登山インフラがネパールのなかでは一段と進んでいるといわれているが、道そのものは古くからの通商路で幅は1.2 m～2 m程度で狭くラバや馬の隊商とすれ違いに危険を伴う箇所も多い。崖上の岩をコの字型に切り取っただけ

の通商路でのキャラバン隊との交差は、岩にへばりついて、隊商の行き過ぎるのを待つしかない。

谷底まで高低差が100 m以上あっても手すりや保護棒があるわけではない。荷物を背負いこの道を上下する運搬人も決して少なくないのだ。

一般に函と呼ばれる深い溪谷を通過する際はかなり高所を巻き道として利用する。大がかりな崖崩れで土砂が対岸を埋め尽くした跡では、古い道が通れなくなり、かなり高所に巻き道を造成した後がはっきり見て取れる。

整備されているのは茶店や食堂、山小屋である。我々は1時間半歩き15分程度休息するペースで川沿いの山道を上流に向かって登って行くがとりたって手足を使う急坂はない。

休息所で我々は水筒の水を飲むが、ガイドやポーターは我々の差し出す水を飲まない。5ルピーのミルク入り紅茶を購入して飲むのだ。ミルクの入った紅茶は、ネパール茶といって我々が日本茶を飲むようなものだ。差し出す水を飲まないのは上のカーストのものには手を出さないということらしい。

チップレンの小集落に着いて昼飯だ。5～6戸の山小屋風の宿兼食堂がある。

メニューは豊富である。ネパールの固有料理「ダルバート」を注文する。彼らも同じものだ。以後5日間彼らは一貫してダルバートを食べる。そして地場産のビール「サンミゲール」を3人で昼食、夕食に5本飲むのが日課になった。ビールは120ルピー(約200円)、5本飲めば山小屋2人1泊分と同じである。

ビールの値段は3,000 m標高のゴレパニを經由し、終着点のナイヤプールまで何処でも値段にそれほど大きな変化はなかった。ビールは隊商によって山に運び上げられるのだ。罐入りビールはここにはない。

ラバや馬は荷物の重みで肩付近に大きな擦り傷がつき易いので消毒や治療する獣医のような人がこうした宿場にいる。人間の運ぶ荷物量の3～4倍はこなすからやはり家畜は貴重な輸送手段である。この地域を見る限りラバが

一番多く、ついで小柄なネパール馬、そしてロバの順であるが、輸送用ロバにはあまりお目にかからない。水牛や黄牛は農作業用役牛として利用されているが荷物運搬には使われていない。

少しでも平らな川底平野があれば、そこは農業生産の現場になっている。概ね水田があり、段丘上に農家が点在する。

ラトパニに着くと川縁に温泉場があった。吊り橋の下の比較的大きな浴槽には水着の男女が50人程度入っている。トップレスの数人の女性が浴槽縁を歩いていてのどかな感じだ。登山客や地元住民が混浴状態とっていいであろう。

分岐点のチャルコーラには登山検問所があり、ここでも入山料を支払われる。2つの吊り橋（一つは川底まで100m以上はあるがトニー・ハーゲンの著「ネパール」の表紙写真になっているこの吊橋には手擦がない。）をラバ隊と一緒に渡ってやがて最初の宿泊山小屋のあるタトパニに着いた。カラガンダキ川のさらに上流には全山雪におおわれたニリギリ南峰(6,839m)がそびえ立っているが、これは刃物をたてた感じだ。

ニリギリは3山からなりニリギリ主峰(6,940m)とニリギリ北(7,061m)があるが南峰のみが鋭角に突きたって視界に入ってくる。

宿泊地タトパニも温泉町でやはりカラガンダキ川の川縁に大きな浴槽が2つある。急崖の谷底の僅かな沖積地部分に小プール状の浴槽があるのだ。泉源はやや奥にありパイプで引いているが湯はやや黒っぽい。ここはラトパニとは違い、ひとつは観光客用、もうひとつは地元民用に分けられている。

分けたわけではないが自然と棲み分けができているのだ。湯は結構熱く長い時間入ってられないから浴槽縁やベンチで休息しながらビールなど飲むトレッカー達で賑っている。めざとくアルコール飲料、清涼飲料、スナックを売る屋台売店が1軒窓を開いていた。

ラトパニの特徴は、街なかにたくさんのオレンジ樹木があり、丁度食べ頃の果実が鈴なりであった。ここは、温泉つき宿場町の感が強く、数件の宿兼

食堂兼土産物屋があった。温泉集落といっても共同浴場があるだけで各宿に温泉が引かれているわけではない。

宿は、部屋がシェアされシャワーもついているので山小屋のイメージではない。夕食は満天の星を仰ぎ見て、冷気に震えながらのビールと肉料理であった。

トレッキング第2日目と第3日目はゴレパニに向かって本格的な登山である。途中シーカ集落で1泊するが標高差約1,7000 mを2日かかりで登るコースだ。

ポーターのキム・バートルには、30 kg 程度を背負ってもらう。2人分だ。

ガイドのラム・バートルは、自身の荷物20 kg 程度を背負う。ポーターのキムは、持参物が自身のナップサック1つ、中身はセーターのような着替え1枚だった。靴下1枚履かず、素足にゴム草履、ぼろぼろになった上下の作業衣のみである。タカリ族の一員であるが下位カーストであることは一目でわかる。

3月中旬のヒマラヤ山間部は標高1,500~2,800 mの山中でも照りつける太陽で汗が絶え間なく出てくる。概ね1時間に1回の休息を入れながら約5時間余でシーカに着いた。この日は半日の行程である。ガイドのラムは宿探しで飛び回り見晴らしがよく食事も上等な小屋を探し当てた。シーカも5~6軒の山小屋集落だ。

シーカに入る手前、空を突くような巨大な氷の尖峰が空中に浮かび上がった。これこそアンナプルナ1峰だ、高い。さすが8,000 m峰である。スケールはド迫力だ。地上から初めて見る8,000 m級の山である。アンナプルナ1峰は、日本の細田一郎隊、フランスのエーリック、デキャンプ隊、韓国のキム隊が挑んだがいずれも雪崩や強風で死者を出したりで断念したが、韓国のパク・ジュワン隊が登頂に成功している。そして振り返るとダウラギリ山が急な壁を従えて聳え立つ。ダウラギリ山は、ここまで日本隊2組を含む10隊が挑戦し、4隊は断念、6隊が登頂した。石川富康隊と小野一太隊はいずれも

北東稜に挑んでの9月、10月の登頂であった。小野隊は2回目の挑戦で頂上に立ったのだ。このなかには55歳の渡辺玉枝さんもいたが、8,000 m級で55歳は女性の登山史上最高齢である。

渡辺さんはチョー・オユー (8,201 m) にも登頂しており、エベレスト山女性初登頂の田部井淳子さんと並びヒマラヤ登山史に燦然と輝く日本の女性登山家なのである。

道中からずっとダウラギリ山 (8,167 m) と雲間から覗くアンナプルナ1峰 (8,091 m) を見ていると完全に疲れを忘れ去ってしまう。歩くのがもったいない感じすらする。ダウラギリ山の東はツクチェ山 (6,920 m) さらに東にダンパス山 (5,951 m) の3峰が並んで見えたが、アンナプルナは5峰のうち1峰が見えただけだった。残る4峰は1峰の陰になって見えない。

8,000 m級の山が2つ同時に間近に見える、それはエベレスト、ローツエなどクーンブヒマールとここ以外にあるまい。

形のよく似た尖峰マチャプチャレ山 (6,993 m) をポカラの宿ムーンライトから見たのは、スイスのマッターホーン (4,477 m) を見たときの感動を上回る。高さの違いは致し方ない。地球上の最高峰地点を見ている実感が湧かないが氷河削剝の尖峰にすごみがある。

シーカの宿もきちんとシェアされた個室でシャワーとトイレこそ共用だが清潔であった。どこの小屋もそうだがトイレは簡易水洗で柄杓を使い水を流す方式を採用していて日本の山小屋の雰囲気とは桁違いだ。

日本の山小屋は北アルプスの一部を除いてまだ水洗トイレは少ないし、本州のアルプス地域では夏期の間、1枚の布団に2人が寝るのは常識になっている。混雑してくると仰向けとかうつ伏せには寝られない。横向きに寝る以外ないし、夜中トイレに起きて自分の位置に戻ろうものなら寝る場所がないこともしばしばである。最初から個室など考えていない。

ヒマラヤトレッキングはイギリスをはじめ、欧米の登山家達が開発してきた。こうした流儀は欧米人の感覚で作りに上げられた構造的なものであり、日

本の山小屋がこの方式をとり入れるにはまだかなりの年数がかかることは間違いない。

シーカの昼下がりにはホテルの庭の食事テーブルに、杏の花が散って舞い、吹雪のような強風であるし、気温も低い。しかし外気にあたる心地良さがあった。

最初見取れていた8,000 mの山々に繋がるようにして7,000~6,000 m級の山は幾つもある。無名峰も多いとラムがいう。シーカは標高1,920 mである。急な斜面に段々畑や棚田が幅のある高低に展開しているし、そこに農業集落が点在しているのが手にとるように見える。かたまつた集村的集落もあれば散村のようにばらつく集落もある。急斜面という地形的制約のもとではこうした集落立地はやむをえない。

ラム・バートルの説明は、米、麦、トウモロコシ、ジャガイモは換金作物だけでなく自給作物としても使うが、バナナや野菜は基本的に自給だという。熱帯の焼畑で必ず栽培されているタロイモやヤマイモはほとんど見かけない。それに数こそ多くないが水牛と乳牛が飼養されている。水牛はこの辺りでバッファローといい耕作に使役する。乳牛は黄牛でオスは肉牛となる。

こうした家畜は、販売し現金とすることもができるから農家にとって貴重な収入源だ。

シーカの宿の婆さんが昔ながらの手織でござを編み、となりの宿では若い女性が庭先で絨毯を編んでいる。婆さんは土の上の網板をおき、しゃがみ込んで麻糸に藁を通していたが、若い女性は網板を立てかけて、立位で作業をしている。こうしてネパール緞通ができあがるのである。

縫製や縄づくり、ござづくりに機械化の姿はない。縫製ではせいぜい手回しか、足踏みのマシンが使われている程度であるから生産性は低い。

半世紀前の日本の農村でも縄づくりや筵づくりは足踏みの機械が導入されていたから、ここはそれよりももプリミティブということになるのであろうか。

ジーカ部落に限らず、タトパニ、ゴレパニ、ヒーレの宿は山小屋というよ

りどれも民宿の感じである。半分農業か手工業をやり兼業として民宿を経営している。

山道筋の民宿的山小屋は、最初飲料水や食品をトレッカーに販売する商店経営を行い、貯えた資金でレストランをはじめ、それに宿をつけ足すことで民宿経営に移行していくという。

トレッカーは欧米人が圧倒的多いのであるが、最近は日本人、韓国人が増える傾向だ。彼らの落とす金は、部落での民宿的山小屋経営者とそうでない零細農業専門家の所得格差をどんどん拡大していくことになるのである。

宿には水道と電気が引かれている。水道は部落の共同水を宿に引き込んでいるが電気は下界から電線を通してしているのだ。水道水は飲めない。かなりの高さまで集落がありそこに家畜などの動物がいて排泄物が混じっている可能性があるからだ。

宿のシャワーは滅多にお湯がでない。請求しても一定程度で打ち止めという返事の仕方をする。

早朝6時起床、窓の外をみて天気を確認する。快晴だ。うっすらとダウラギリが見え、次第に朝の陽光に照らされて山の輪郭がはっきりしてくる。雪山の色彩も黄色から白色に変化する。山の写真は早朝か夕刻かがいい。山の凹凸が鮮明であり、また白い山に赤・黄などの色彩に染められるからだ。

3日目はシーカからゴレパニまで約4時間半の登りである。標高差は1,000 m、前日と同じ鉄平石(板状節理によってできた石)の階段のような登山道、こうした石がこの付近で沢山採石できるから階段状の道や屋根に敷き詰めて使うのだ。

農村集落を結ぶ住民の生活道路を歩く。今は乾期、この地方は2毛作はやっているが2期作はない。標高2,500 mあたりまではずっと棚田や段々畑が続いている。裏作には乾燥に強い小麦や大麦、トウモロコシが栽培されている。トウモロコシは芽が出たばかりである。3ヶ月程度で収穫してその後は米の

栽培にかわる。

小麦には黄金色のものと緑色のものがある。収穫期に幅があるのだ。日本では冬小麦の収穫時期を麦秋などといって6～7月に一斉に黄金色になるのであるが、周年収穫が可能な地域では、収穫期にも幅がある。

2毛作をしていない耕地は、役牛にデスクハローをつけて耕起しているが、2頭曳きが一般的である。

熱帯地域のような焼畑やハック耕などは見ることはない。

やがて、標高2,500 mを越えると、耕地が消え、山林がでてくる。急に緑が濃くなるのだ。標高が高まると水分の蒸発量が減るためであろう。森のなかに赤い花々が咲いている。これはラリグラスといわれるもので4月になれば、全山が深紅のローズ色に染まるという。日本で見るとシャクナゲであるが高さ数十m、樹木直径も1 mに達するような巨木のラリグラスに赤花がびっしり咲く。今のところ2部咲きというところか。樹林のなかにはロコト（沈丁花）が咲いているが匂いは強くない。

早朝、シーカを出発し、このルート of 最高峰ゴレパニ部落に11時10分に着く。

ゴレパニは峠集落であるから10数軒の民宿山小屋と関連する人々の住宅、土産物店や学校があった。農業としていない気配はない。トレッカーのために造成された単純な山小屋集落である。

ラム・バートルは宿を一軒一軒確認し、ここでも展望のいい「ホテル・グランドビュー」を予約した。ホテルと書いてあるが山小屋民宿である。彼はいくつかの宿の中を散見してから予約をする。部屋、トイレ、シャワーが清潔であるかどうか、見晴らしが利くかどうかなどをチェックするのだ。食事は大抵入り口付近に大きなメニュー板が張り付けてある。食事だけに立ち寄るトレッカーのために。もちろん山小屋に予約制はこの国もありえない。本格的トレッキングシーズンでも、ホテルが満室になることはないと言ったが、どの山小屋の民宿も客室数にはかなり余裕がある。こうした宿のあり方

がいかにも西洋的である。

宿の山小屋の食堂は薪ストーブが焚かれている。室温 15 度、ストーブ近辺にいれば暖かいが、離れるとやはり寒い。寝室には暖房がないので持参したカイロを使う。

宿で久々日本人に会った。金重氏 (50 歳) で岡山県の備前焼き窯元である。

カリガンダキ川の上流ムスタン王国から歩きジャムソンを經由してラトパニに辿り着いたとのこと。ムスタン王国は入国許可料が 700 米ドルだったというから 8 万円を支払ったことになる。高価な入国料だ。神道系新興仏教の信者で神様好き。組織としての宗教は嫌い。勝手に靈気を求めて歩き神道風の祝詞をあげて歩くのだそうだ。

金重氏は、家内工業的焼き物業は定年もなく一生現金収入にありつけること、好きなとき長期海外旅行ができる有利性があるとの誇りを披露していた。

早朝宿の庭先が騒がしい。昨夜 9 時頃、50 m 離れた隣宿で火事があり山小屋民宿が全焼したのだ。夜中の 12 時ごろ鎮火したらしい。火事の直後、類焼を恐れて「グランドビュー」の客は家主が外に誘導し施錠をしたという。我々は熟睡していて火事など全く知らないまま朝まで寝ていた。危ないところだった。それにしても部屋にいる人数も確認せず施錠する家主のあわてぶりも眼に浮かぶし、騒ぎを知らず寝込んだ我々の疲れかたもそうとうなものであつたらう。消防車が来るとか、サイレンが鳴ることがないただ燃えるに任せた静かな山火事だったのではないか。

焼け跡から 40 歳の家主の遺体がでてきた。子供 2 人の父親だという。早朝まだ煙があちこち漂っている焼け跡に立つと、ジャガイモ、インスタントラーメン、ビールの残骸が痛ましかった。

地元警察が見舞金を集めている。見物客は 10 ドル程度見舞金を支払っているが警察は必ず氏名等を記帳する。焼けた宿にいたトレッカーの宿泊者は 15 人、急いで飛び出したため全員がパスポートを含む荷物いっさいを灰にしたのだ。

4日目の朝は曇り気味、宿から標高3,200 mのプーンヒル山頂は見えるのだが肝心のダウラギリやアンナプルナ峰は雲の中だ。天候の回復を待つ。2時間遅れて8時20分宿ゴレパニの宿を出発し、50分程でプーンヒル山頂に着いた。展望台があり雲の切れ間から2つの8,000 m峰が覗き見ることができるのであるがすぐに隠れてしまう。プーンヒルは今回のルートの最高峰であり、最も期待の大きい展望場所であったが、うまく写真におさめる景観にはならなかった。

復路をゴレパニに戻り、ヒーレに向かって下山を開始したのは午前10時40分であった。

鉄平石の階段状の山道の大半は急坂。半日以上も下るのはとてもしんどい。ガイドが「ビスターレ」(ゆっくり行こう)を連発する。ヒマラヤは日本の山に比べ、大きさと深さが違う。すぐ先に見える谷に降りるのに半日以上かかるのだ。相変わらずラバのキャラバン隊とよくすれ違う。中継地のバンタテで食事をとる。急に空が暗くなり雹が屋根を厳しく叩きはじめた。避難のためナイヤプール方面から登ってきた日本の学生達数人が軽装で食堂に立ち寄った。やがて激しい雨になる。止みそうにない。かれらは雨のなか出発したが誰1人雨具も持参してない。折り畳み傘と合羽をリュックに入れておくことは山歩きの鉄則なのに。卒業旅行に来ている彼らは日程に余裕がないらしい。ヒマラヤでは高山の雪山で転落死や高山病死する人々ほか、トレカッカーの事故死や病死が後を絶たないと聞いていた。その犠牲者でもっとも多いのは日本人だということも語り継がれている。

まさに、無謀登山というほかない。高山では雨に漏れると急速に体温を消耗する。ゴレパニで我々はカイロを背や腰に使っているほど低温なのだ。

ウレリ村を通過する。ブルンジコーラ川の深い谷に突っ込んでいく急坂だ。

1975年2月中旬、明治大学大学院生の齊藤達郎氏(地理学専攻)が現地の強盗によって山道から突き落とされて死亡する事件が起こった場所である。彼の遺体は3か月以上経過した6月上旬捜索していた日本人と地元村長らに

よって確認されたが既に白骨死体だった。犯人はカメラやトラベラーズチェックを持参していたとして逮捕されたがプラン・プラサードという羊飼いの男で30歳ぐらいだとされている。組織的犯罪者でもなければ、プロの強盗の手口でもなさそうである。

トレッカー用の登山路は急崖を切り取っただけで手摺りもない凸凹道が多く、強盗に襲われずとも転落の危険性は常にある。また、現地人と観光客の経済格差、文化格差は予想外に大きく、現地人に見れば外国人登山客の行動様式は文化侵略に映じていることも確かのようにだ。

6時間20分下りに下ってヒーレには午後5時に着き、宿を「ホテル・モンタ」に決めた。宿代は2食付き、1,200ルピー。宿代や飲食費はタトパニ、シーカ、ゴレパニ、ヒーレとも似たような値段である。宿は農業との兼業であることはすぐ理解できる。宿の裏手に回れば農作業の道具があり、下屋には牛2頭が飼育されており、畑にはジャガイモとレタスが栽培されている。半世紀前の日本農家の軒裏の景色そっくりだ。

トレッキング最終日、早朝5時頃馬キャラバン隊の鈴音で目が覚める。荷を入れた籠を背負った子供2人が宿前の道を通り過ぎる。まだ薄暗い。こんな時間から彼らは行動するのだ。

ブルンジコーラ川沿いの終点ナイヤプールに到着したのは午前11時だった。ヒーレを出発してわずか3時間余であるが急な下りの連続で足はガタガタになった。以後2～3日足の痛みに悩まされる。

ナイヤプールで警察に下山の手続きを済ませる。この場所は先述の斉藤氏(明大)が登山届けを出した最後の場所で、捜索隊がこの届けを見て殺人現場を推定している。この地には医者が開業しているし土産物の露天商も数十軒道端に並んでいる。ポカラに向かう道路沿線には30台ほどのタクシーが客待ちの状態、タクシー代を下げるから乗るようにトレッカーたちに呼びかけている。標高は1500m程度であるが、やや寒いせいか女性は長いスカートとブラウスの上に厚めのショールを巻いている人が多い。ここでポーター

のキム・バートルとのお別れだ。キムにはガイドのラム氏から5日分の日当1,000ルピー(1,500円)が支払われ、私からは500ルピー(750円)のチップを支払った。チップとしては多すぎるといえるが、彼はこれから1日かけてベニの街のかなり奥の自宅まで帰ることになっている。

ポカラからベニに通ずる道路は、アンナプルナヒマールの基幹道路であるが土砂崩れ跡が多く、つねに危険にさらされている。

7. 商業の中継地から観光都市へ変化したポカラ

3月8日、首都カトマンズからトレッキング出発点のベニまでバス、車を乗り継いで2日かかる。とりあえず中間点のポカラまで行かなくてはならない。この間は200km弱、車で7～8時間の行程である。飛行機では40分だ。といってもこの程度の時間でいけるのは最近のことで、1952年ここを通ったスイス人のトニー・ハーゲンは10日間を要した、と記している(前掲「ネパール」)。川の徒渉と馬の流失が原因で時間がかかったようだ。

出発前の短時間に空港からエベレストをはじめ、クープヒマールの8,000級の山々をプロペラ飛行機で眺めることにした。今回はトレッキングでこのコースに来る予定もない。しかし、離陸予定が天候の状態で、飛ぶことになったのは4時間遅れの11時過ぎであった。

それで、ポカラ行きがバスでは無理になり、タクシーをチャーターすることになった。結局、出発は午後2時となる。カトマンズからポカラまでの街道はプリティビ・ハイウェイといい、王政時代のシャハ王の名前をつけた立派な一級国道であると想像していた。だが、舗装は中央1車線のみ、ときに未舗装のグラベルロードありで、途中交通事故での渋滞もあって予想外に時間がかかりポカラに到着したのは真夜中だった。

翌早朝、ホテル・ムーンライトの屋上から見たアンナプルナ連峰は想像を絶する光景であった。

正面にマチャプチャレ峰 (6,993 m) が氷の屏風のように立ちはだかり、その西にヒューンチュリ峰 (6,441 m)、とアンナプルナサウス峰 (7,219 m)、東にアンナプルナIII峰 (7,855 m)、IV峰 (7,525 m)、II峰 (7,937 m)、ラムジャン・ヒマール峰 (6,931 m) の 7,000 m 前後の高山を従えて壁をなしている。

アンナプルナとはシバ神パルバティの異名であるというが、現地では「穀物に満ちた」という意味らしい。エベレストは「大地の女神」の意であるように。

マチャプチャレは周辺峰に比較して決して高い山ではないが手前にあり、急峻でアルプスのマッターホーンによく似た秀峰だ。神の山として知られ登山は許されていないから登った人もいないとガイドのラムはいていたが、文献を読むと、1957年イギリスのジェームス・ロバーツ大佐が初登頂したと記録されている。

ポカラ市街の北に円錐状のサランコットの丘 (1,590 m) がある。山麓の駐車場から山道を歩いて約1時間で山頂に着く。ここからの眺望は一段と迫力があり、ホテルで見えなかった 8,000 m 級のアンナプルナ I 峰 (8,091 m) や、やや西のダウラギリ峰 (8,167 m) を視界に収めることができる。マチャプチャレ峰は南の急斜面に雪の付着がよくないため氷状の色彩を放つが多くの連山は雪をすっぽり被っているので純白の布をかけた感じに映る。

ポカラはネパール中央の観光保養都市の性格を有するが、元はチベットとインドを結ぶ隊商路の中継地として発達してきたし、今日もその性格は少なからず持っている。ポカラ市内にはラバ隊、馬隊などキャラバンの姿を見かけるからだ。

以前 (1949 年以前) は衣服や更紗、綿製品や珊瑚、真珠などインドからきたものをポカラ経由でチベットに運び、チベットからはネパールに塩や銀貨、香料が運ばれていた。その1部はポカラを経由してインド方面にも運ばれたのである。人や隊商が移動すれば宗教や言語も移動し、文化的な融合が起こ

るのは当然である。

チベット仏教(ラマ教)がネパールに浸透し、インドのヒンズー教がチベットを經由し、モンゴル辺りまで普及した。内モンゴル都市フフホトに五塔寺という寺があり、そこにはインド文字の教典が石碑に刻まれている。

大陸の文化は東西の移動で語られることが多いが、南北への文化伝播の波がここでも認めることができるのだ。カトマンズだって同様の役割を果たしたことは、ボタナートにあるストゥーパ(仏塔)をみればわかる。ここは古くからのチベット仏教の巡礼地であったが、中国革命後のチベット武力併合で、多くのチベット人が亡命してここに住み着きチベット人による僧院や住宅、工場が張り付いた。従ってボタナートの4層の台座、半円形のドーム、13層からなる尖塔は世界でも有数のチベット文化の中心である。

ポカラとカトマンズの間にはマナカマナの街があり、ここには同名のヒンズー寺院や沐浴池がある。インドから入ってきたもので、現在のシャハ王家がゴルカ時代に造ったものらしいが、王家と密接なヒンズー教とインド文化の伝播を伺わせる。

ポカラ市街はタワ湖という人造湖の東側に発達した街である。タワ湖はハルバンコーラ川を堰き止めたもので最近の山岳観光に寄与するとともにフェキダイ国王の別荘があったりする。

タワ湖畔通りがホテルやレストラン、土産物店が集中する繁華街で、この特徴は登山関係用品が非常に多いことだ。ノースフェイスやミレーといったいわゆるブランドのリュックやコート類、山靴やピッケルなどが格安の値段で販売されている。

最近ではメーカー品、ブランド品といっても途上国で製造されているものが多い。製造国名は入っていないが信じられない安さである。

それに、どの店も英語が通じる。トイレやレストラン、ホテルの様式も完全欧米スタイルだ。街の国際化が進んでいるのは欧米人の来訪機会が多いことに関連している。

他方では、カトマンズとポカラを結ぶバスは、公共バス、ツーリストバス、グリーンバスなどと分かれ、料金や客層にきちんと区別がある。ホテルなら 200 ドル以上から 10 ドル以下まで様々だ。

カトマンズとポカラを結ぶプリティビ・ハイウェイは土砂崩れ、地滑りの跡があり、十分修復されているとは思われない。崖上の路肩の弱い部分もリボンのついた棒が立てられているだけだ。インフラストラクチャーが未整備である、といっても整備する予算がないのだ。

我々が泊まっているのは中位のホテル「ムーンライト」(1泊 17 ドル)であったが屋上からの展望の良さが際立っていた。

湖畔通りで 150 人程度のデモ隊に会った。プラカードを掲げて埃っぽい未舗装道路をなにやら喚きながら行進している。若い人々が多い。聞くとところによると「仕事よこせ」デモである。警察などの警備はどこにもみれない。ネパールの失業率は 20%を越えているというからただごとではない。ポカラのような観光・保養都市は外貨が大量に入り込んで貧富の差が拡大し、それにカースト制の差別が重なって、人心は一層複雑で差別を増幅させているように感じる。

ポカラに限らずネパールは何処にいても人口が溢れているとの実感を強くする。特に田舎に子供や青年層が多く、田畑も少ないから仕事量にも限界がある。人口密度は 148 人でお隣の中国の 131 人を上回る。

人口の 2,100 万人は世界で 40 位、190 カ国では上位に属するといっていであろう。オーストラリア大陸の人口を上回っているのだ。しかも、ここ半世紀の間に人口は 4 倍に増加している。

なぜ、人口がこれまで急増するのか。5 年前タンザニアの田舎の農村を歩いた時のイメージが重なってくる。ここでも農村部に若い人や子供達が溢れていた。

「人口爆発」の言葉は、こうした人口急増の状況を指す。

第2次大戦後、こうした途上国は保健医療が発達し、衛生面で向上したことが背景だとよく言われる。それに比べ産児制限などの思想が発達してこない。子供を労働力と考え、子供の稼ぎを家庭の収入源とする思想だってある。イギリス軍に雇われていたグルカ兵達は、平和の回復で軍が人員縮小をしたため、帰還した若い兵士が子造りに励んだ、との話も聞く。

ポカラの郊外にはスラムのような貧民窟がある。木枠にナマコトタン、その上に石の粗末な住居群を見た。ブラジルでいうファベラだ。都市で再生産される人口に、農村から流れ出し、都市に集中する人口が合体して都市域が拡大する。

ポカラの土産店で売られている刺繍や衣服は手回しのミシンによって製造されているところを見てきた。

手工業から家内工業のレベルだ。製造業や地下資源開発を行うにも、国内インフラが整備されずマーケットが生まれにくい。外国といえば北の中国とはヒマラヤの障壁が立ちほだかり、南のインドとはタライの平野で結ばれているが、逆にインド人の商業活動や農業活動に支配を許している状況だ。

19世紀以前は、タライ平野からインドのヒンドスタン平野にかけてマラリヤが蔓延していてこれがインドとの障害物であり、物資や人的交流の妨げになっていたのに。

マラリアが退治されると、インド人がネパールに押し寄せる。インドの商人達は商業的空白地を利用し、卓越した商売法でこれを埋め始めた。なかにはネパールに帰化したり、定住地をネパールに移した商人達もいた。

商業資本はやがて産業資本に転換し、製造業に乗り出すインド人たちも現れた。

インド人がこうした産業でリーダーシップを発揮し、ネパール人を凌駕し始めると、逆にネパールの人々は、富を奪い去られ、就業の機会を失い、日雇い程度の下働きの不安定就業層ないし失業層に転落するのである。このことは、実質植民地化を意味する。

そうしたなかでもポカラは相変わらず北のチベットと南のインドの通商路の拠点都市というか、中継都市として性格を残しつつ、北はキャラバン隊でしか通行できない障壁に挑んできたのだ。

そしてインフラの未整備が今日のヒマラヤ地域の観光や登山の近代化を拒んで、逆に優雅な自然を残す結果となった。

ポカラは、長い眠りのなかから急に叩き起こされたようにクライミングやトレッキング客来訪の時代を迎え、市街地の変化がすさまじく進んだ。遂ここ 20~30 年の間である。

世界のアルピニストが集まる。極端な経済格差を利用して、外国人相手の商売、つまりホテル業、レストラン業、土産など小売業、通訳やガイドまでがドルを相手に商売するようになって、彼らが扱う金額の拡大に、地元民相手の商売とは格差が大きくなりはじめている。外国資本の直接進出はそれほど目立たない。でも、喉から手がでるほど外資がほしいネパールだ。街の変化は当然であろうが、ヒマラヤ奥地に続く自動車道路などの建設に及ばないことを願うばかりである。

8. 巨石に狭まれたヤムイモ

ヤムイモは日本でながいも、とろいものに似た熱帯地方のいも類であり、主食の1つになっている。「巨石に狭まれたヤムイモ」と表現したのは、19世紀ネパール国王のプリティビ・ナラヤン・シャハであった。「動きがとれず、影響ばかりが大きい」ということらしい。

小国ネパールは大国中国とインドの圧力や影響を常に受けざるを得ない。二つの大国は時々の政治情勢のなかで礼束で頬を張る行為をネパールに行ってきた。

プルナ・ラタナ・サキャ「ネパールとチベット」によれば^(註18)中国は1960年、3年間で1億ルピーの無償経済援助を行い、翌年には中国・ネパール友

好道路建設に 350 ポンドを供与する代わりにネパールのチベットにおける治外法権や軍事介入権を放棄させている。中国政府のチベット支配強化にネパールを協力させるための強引な経済援助である。

それでもチベットとの間は巨大な障壁ヒマラヤが存在するから中国の日常的な経済的影響はインドほど強くない。

インドとネパールはタライの平野を介してヒンドスタン平原にダイレクトに連なっている。タライ平野はガンジス川流域に包含される。風土病が蔓延していたり、猛獣の棲息地帯であったころは人間や物資往来の障壁になっていたが、こうした悪条件が克服された 20 世紀にはインドの影響がネパールに強く浸透するようになる。

井上恭子は、「インドに閉じこめられたネパール」^(註19)で 1989 年の経済封鎖事件を取り上げている。

「ネパールが中国から武器を輸入しようとしたことや、ネパールで働くインド人労働者に労働許可証の取得を義務づけたことなどにインドが反発して経済制裁を発動した事件である。インドはこのとき、ネパールとの国境を大半封鎖する。灯油、ガソリン、食品など生活必需品の供給が途絶え、ネパール経済はパニック状態になった。

結局、ネパールは中国からの武器輸入も、インド人労働者への労働許可証の取得義務も撤回している」。

小国ネパールは物資流通の門戸をインドに大きく開いていて、インド領内を通過することで他国との貿易も可能になる。そうした位置関係、立地上の宿命を負わされているのである。

ネパールは常に 2 つの大国の政治状況や経済動態に眼を配り、刺激を与えない交渉環境を構築していかなければならないのだ。

ヤムイモは柔らかく細長い。巨石で押し潰されそうになっているネパール国の環境的宿命をよく表現している言葉であると思われる。

9. 結びにかえて

カトマンズに降り立ち市街に車を進めると、ここは世界最貧国、1人当りの国民所得210ドル程度の国であるのかどうか自分の眼を疑う光景に出会う。街には高層ビルこそ少なく、歩道も整備されない自動車道路が至るところあり、埃っぽくゴミも散乱して非衛生的環境にあることを知るのだが、商店街は活気があり、ひとびとの暮らしは貧富の差こそ大きいが決して貧しいとは思えない。貧しそうな家は多いが、物貰いや路上生活者もほとんど見ることはない。

20世紀中葉、自動車道路でインドとカトマンズが結ばれて以来、インドやインド以外の外国の日用雑貨や諸工業製品が、そして文化・芸術の分野の情報が急速に普及し、外国の映画、音楽、ファッションがまちなかに姿を見せ始めている。

その陰にはブラックマーケット（闇の経済）とは言えないまでも、陰の経済が見え隠れする（山本真弓：「ネパール」^(註20)）との見方もでてくる。

山本は、「金・麻薬の売買、古美術品・木材・野生動物の密輸出、外国援助をめぐる賄賂、ネパール市民権の売買などのほか、公の経済統計には決して表われない非合法外国人労働者として外国に渡ったネパール人達の送金も急速に増えている」というのである。

グルカ兵に限らず隣国インドをはじめ、東南アジアに出稼ぎにでるネパール人が多く、カトマンズの日本大使館はネパールから日本に短期観光旅行をする場合でも日本人の「身元引受人」を要求し、不法就労しない約束を取り付けている。

カリガンダキ川中流でダウラギリ山(8,167 m)の登山墓地になっているベニのホテル経営者ガウチャン夫妻（ネパール人でタカリ族）が日本を訪問したときも、いわゆる「スポンサーレター」を書くよう要請され、これに応じ

たことがある。それより驚いたことは、彼らは観光旅行でアメリカ合衆国を1か月旅行したあと、日本に2週間滞在して帰国したのである。人の懐をとやかくいう気はないが、最貧国の人々が先進国並の旅ができる。彼らは上記のような不法・不当な金銭取得をしているわけでは決してないとおもわれるが、外国人との接触の多い仕事だけに、標準以上の生活が可能になるのかもしれない。

先ほどのような陰の経済が浸透している背景はネパール独特の政治体制が関与しているのではないかと思われる。第2次大戦後、王政復古と王権の強化、民主化を認めない専攻支配が1990年まで次々繰り返され、国政を預かる政治家と特定カーストないしは役人に利権を与えられ、それが政治賄賂の温床となっていたのである。

21世紀に入った2001年6月1日、カトマンズの王宮では皇太子による銃の乱射で国王夫妻ら11名が射殺され、自らも銃で自殺するショッキングな事件が起こった。

これをショッキングな事件というのかどうか。なぜなら王族間の陰謀、裏切り、暗殺は政権の争奪など世襲制による独裁政治と結びついてしばし歴史上発生している。1990年の民主化では、国王は象徴となり、議会制民主主義と直接選挙などの民主化が進んだはずだが、王族内の矛盾は消し去れていないようだ。なぜなら、暗殺事件後の国王は90年の民主化に強く反対意志を表明していた人物だからである。

ネパールの農業景観や農業の生産力構造もこの国の政治状況と密接な関係にあることは当たり前のこととされている。メジャークロップである米の生産は1ヘクタール当たり2.45トン(1999年FAO資料)は同じアジアのインド、バングラデシュ、フィリピンより低いし、エジプトやスペインの3分の1以下である。

これは農業の機械化、化学化、装置化などの近代化の遅れだけでない。圃場整備や灌漑施設、農道や輸送手段の未整備、土地所有が地主層に偏在して

いるなどの問題がある。

基本的には費用不足や技術力不足、それに地主層の土地所有へのこだわりを政府が勇断をもって処理できないことである。ODA の政府開発援助は末端現場の灌漑施設に投入される前に消えることがしばしば起こりうるし、賄賂として上層部に吸収されることも珍しくないのである。

インフラストラクチャーの面の整備が遅れていることに関連していえば、巨大なヒマラヤ山麓の開発が進行しないために自然がほぼ丸ごと残されている、そういった場所の存在であろう。このことは地球の環境汚染が進むなか貴重な教訓をわれわれに与えてくれる。自動車道路がないためにわれわれはヒマラヤ山脈を身近に見るために、また山行するために何日も、何十日も歩かなければならない。そのことの重要性をヒマラヤで強く認識することになった。

注欄

注1：O・B・ビスタ著・田村真知子訳『ネパールの人々』古今書院 1982年4月 p18
Giuseppe Tucci(1962): Nepal, The Discovery of the Maalla. p60-61, 68 London.

トニー・ハーゲンが白水社刊行の『ネパール』のなかで、“ネパールのように狭くて、多様な人種、民族、言語、文化を抱えている国は他にはほとんど見当たらない。だからネパールは、アジアは民族博物会場〈ジャーター・メラ〉と呼ばれるにふさわしい国なのである”と述べている。p94

注2：国連開発計画(2000) p16-63

注3：長南史男編著『南アジア灌漑効率の比較研究』p95 Bhairahawa Lumbini Grandwater Project,3 Status Report, June 1997からの引用。米、小麦、サトウキビに限らず豆類や野菜類でも灌漑による増収が認められている。

注4：トニー・ハーゲン著、町田靖治訳『ネパール』白水社

注5：鹿野勝彦「ヒマラヤの国の課題」『アジア読本ネパール』p89 「政治統計によるネパール刊行の概要」によると、1975年の外国人登山者、トレッカーは12,587人(外国人旅行者の13.6%)で旅行者換金外貨額は1.7億ルピーである。それが1993年には、登山者、トレッカーは5.5倍の7万人(同23.7%)に増え、換金外貨額も20倍近

くに達している。外交官やジャーナリスト、研究者や開発協力機関の関係者から登山客、トレッカーが増加し、外国人旅行者の性格が変わっていったのである。

しかし、おもしろいことにネパールに位置する8,000 m級高山の初登頂は1960年代ですべて終了している。

注6：ケシャブ・ラル・マハラジャン「民主化後の土地改革」鹿野『前掲書』 p 44

このなかでマハラジャンは”ネパールは国土面積のなかの農業適地は18%、可耕地は既に90%が耕作されていると考えている。農家1戸当たりの平均耕地面積は0.9ヘクタールで全体の7割が1ヘクタール未満である。こうした土地所有の背景は“1940年代まで公務員、あるいは王族や貴族に奉仕する人々には給与の代わりに、その一部として土地が与えられた”ところが1964年の土地改革でこうした大地積を所有する人々は“法の眼をくぐるあの手この手を使い、耕作者への権利委譲や政府による安値買収を免れた”だから“見えざる力”、「雲の上の存在」、「地獄まで探しにいても見つからないもの」等で表現させるものに阻まれ、土地改革はなかなか進まない”。

注7：川喜多二郎著『ネパールの人と文化』 p 156 川喜多によればネパールには5種類の牛がいることになっている。1つはインド水牛の流れを汲む乳用と厩肥生産用の水牛で標高は1700 m以下に分布する。農耕、運搬、乗用に利用されることはないと書いてあるが農耕用として見かけることが少なくない。2つはインド牛（ゼブ）と呼ばれる役牛・乳用でタライ平野に多く分布する。高温・風土病・寄生虫に強く、農耕には欠かせない。3はヒマラヤ牛で標高1500 mから3700 mに分布し、和牛や朝鮮牛に似た温順で畑の耕起には重要であり、乳用にも利用。4はヤクと牛の交配種ゾーがいる。オスには生殖能力がないらしいがメスの受胎能力は高い。標高2,300 m以上で飼育され寒さ、粗食に強い。ヤクより性格が温順で農耕用に使われる。5はヤクである。これはチベット人の山岳地帯の通商運搬用家畜として良く知られている。野生種と家畜化したものがある。

注8：川喜多『前掲書』 p 159 馬は足の細い高原型、草原型のものが多く、乗用に利用される、しかし、実際カリガンダキ川沿いの通商には小型馬が荷物運搬や乗用に使われているし、ラバとロバでは断然ラバの利用頻度は高いことがわかった。寒さ、暑さに強く、環境が急に変化してもへこたれず長距離向きといわれる。

注9：『Economic Survey』1990, 1989/90, 『Agriculture Statistic of Nepal』1990

「主要食糧作物の生産」には、1974 / 75～1989 / 90の15年間の主要穀物生産変化が掲げられている。これによるとメジャークロップである米の栽培面積、収穫量ともわずかな伸びに留まっているし、土地生産性も1.2倍程度の上昇だ。米のヘクタール

あたりの平均収量も2トンから2.4トンに伸びたにすぎない。それに対してこの3部門で小麦やトウモロコシは1.5から2.0倍に伸びている。灌漑設備が少しずつでも普及してきたり、施肥技術が進んだ成果とみられるが世界の趨勢からはかなり低い。大麦やシコクビエは横這いで推移している。

注10：遠藤寛二「農林業発展の動向」『ネパールの農業—現状と開発の課題』社団法人国際農林業協力協会 1992, 3。遠藤は生態学的地域区分 (Ecological Zone) として標高4877 m~8848 mを「Mountain Area」、610 m-4877 mを「Hill Area」、610 m以下を「Terrai Area」として特徴を述べている。この地帯構成は概ね一般的に利用されているが、もっと単純化してこの3地域区分を600 mと3000 mとする考え方も散見できる。

注11：川喜多二郎著『ネパールの人と文化』古今書院 1980年7月 p 161

注12：トニー・ハーゲン『前掲書』p 182-186

注13：国際農林業協力協会編『ネパールの農業—現状と開発の課題—』1992年3月 p 19-20

注14：川喜多『前掲書』p 169。川喜多はシェルパ伝播説には否定的でチベットからの導入説をとる。理由は標高2,500 m以上の高地でジャガイモは夏作物として重要で、3000 m以上のチベット人地帯に多いことをあげている。種芋としても高地から交換物質として導入しているふしがあるというのだ。

注15：国際農林業協会『前掲書』p 31。「米の平均収量の地域差」図は、年次によって収量にかなりバラツキがあるだけでなく、跛行的である。タライなどローランドはハイランドやミッドランドより収量が低い状況が1982年ごろまで続いたが、82年以降は他地域を凌駕する生産性に転換していった。後発発展地域である。

注16：トニー・ハーゲン『前掲書』p 44-45によれば“ヒマラヤ山脈を横断する先行性の横谷では谷底から山頂までの水平距離が極めて短い。スイス・アルプス山中の最も深い溪谷さえも比較にならないほどである。例えば8,091 mの標高でそそり立っているアンナプルナ山頂と8,167 mの標高をもつダウラギリ山頂とがカリガンダキを狭んで直線距離で35 kmしか離れていない。このカリガンダキ沿いの部落タトパニの海拔は1,200 mである。

8,156 mのマナスル山頂と7,937 mのアンナプルナIIの山頂もほぼ同じ距離でまたぎ登えている。

注17：トニー・ハーゲン『前掲書』p 87は、この雪男はシェルパ族の間で主張されている生物であるとして、次のようなことを書いている。“イエティは直立して歩き、極端

に攻撃的で言葉に似た手段で意志を伝えあっていると信じて疑わない。夜中にシェルパ族と一緒に暗い家のなかに腰掛けていろいろ端で火が燃えているのを見たり、ヒマラヤ山脈主稜から吹き下ろす氷のような冷たい風が、岩壁の裂け目を抜けて、ヒューヒューともの悲しい音をたてているのを聞いたりすると、かれらはイエティが山小屋に住む人間をどんな具合にむさぼり食うとか、小さな女の子をどうやってさらっていくかなどいった身の毛もよだつイエティの話をしたがる。”

注 18：プルナ・ラタナ・サキャ「大国のはざままで—ネパールとチベット・中国関係」石井溥編『前掲書』p 62

注 19：井上恭子「インドに閉じこめられた国」石井溥編『前掲書』p 55

注 20：山本真弓「90 年民主化とその背景」石井溥編『前掲書』p 2222

参考文献

石井溥編『もっと知りたいネパール』弘文堂 1986

川喜多二郎『ネパール王国探検記—日本人 世界の屋根を行く』光文社 1957 (再録：川喜多二郎著作集 1 中央公論社)

長南史男「南アジア灌漑効率の比較研究」—LLDSs への農業技術移転の視点から—『平成 10 年度—平成 12 年度科学研究費補助金 (基礎研究) 研究成果報告書』2001 年 2 月

川喜多二郎「ネパールの人と文化」(リージョナルブックス)1980 年 7 月 古今書院アジア研究所『ネパールの農業と土地制度』(アジア経済研究シリーズ 18)1961 年 11 月 アジア研究所

日本ネパール協会編・川喜多二郎監修『ネパールの人々』(ネパール叢書) D・B ビスタ著、田村真知子訳 1979 年 4 月 古今書院

石井溥編『アジア読本・ネパール』(ヒマラヤの国のもうひとつの顔)1997 年 3 月 河出書房新社

小野有五『ヒマラヤで考えたこと』(岩波ジュニア新書)1999 年 1 月 岩波書店

熊谷かや『ヒマラヤの見える学校で』(ネパールの村教師滞在記)1994 年 2 月 山と溪谷社

内田良平『アンナプルナ周遊』1993 年 11 月 山と溪谷社

内田良平『ネパールトレッキングガイド』(歩く見る撮る)1989 年 4 月 山と溪谷社

トニー・ハーゲン著 町田靖治訳「ネパール」(ヒマラヤ王国)1989 年 5 月 白水社

[The Beautiful mountains of Nepal Pilot Bed Upreti Capt.(Pilot)Suresh Bisuta Lt. col. K. B. Thapa(Retd)]

Giuseppe Tucci(1962): Nepal, The Discovery of the Malla,London,p 76

池田常道編『山岳年間'95』 山と溪谷社 1996. 6

国際農林業協力協会『ネパールの農業』(現状の開発と課題) 1992. 3

「海外農業開発調査研究・国別研究シリーズ, No. 47」